

近世の地域社会と在方町

—— 摂津国茨田郡守口の呼称をめぐって ——

渡 辺 浩 一

はじめに

在方町とは、代官・郡奉行支配地における都市的な場というほどの意味であるから、その構成員は百姓であり、集団としては年貢を納入する村である。したがって、その多くは「村」と呼ばれたが、「町」という呼称を持つ在方町も少なからず存在した。^(注2) そのような「町」呼称が近世社会においてどのような意味で使用されたのかを考察するのが本稿の課題である。その場合、地域社会とのかかわりが重要な問題となる。自らの集団をどのように表現するかは、公儀・領主との関係及び、その集団が地域のなかでどのような位置を占めているかということにかかわるのであり、その位置付けが在方町自身の認識と周辺村落の認識でズレが生じる場合もある。また、在方町内部の階層によっても認識の差は当然存在するであろう。そこから、同時期に同一の在方町について複数の呼称が併存するという現象がおこるのであって、呼称が無秩序に使用されているわけではない。在方町の呼称の併存や変化という一見些細と思われる現象から、近世の地域秩序の変容の問題を考えてみようというわけである。

管見の限りでは、在方町の呼称の問題についての最初の言及は、一九五八年の地方史研究協議会の大会での討論での、林英夫氏の発言である。林氏は支配系統の違いで同一の村や町が「村」とか「町」もしくは「宿」などと呼び分けられると発言している。^(注3)これは宿駅の史料群を閲覧したことがあれば誰もが漠然と認識している周知のことと思われる。論文での最初の言及は歴史地理学の中島義一氏である。^(注4)氏は一連の論文を通じて、全体としては地域によって「町」と呼ばれるものが異なること、また「町」以外の都市的集落の多様な呼称を明らかにしている。すなわち地域による町認識の違いを明らかにしていると概括できよう。

宿駅に対象が限定されるが、呼称に本格的な考察を加えたのが丸山雍成氏である。^(注5)宿駅の「行政単位」(年貢負担単位)は村→町→宿と変化し、その変化の背景には「近世的村落の成立→市町の形成→宿場町の完成」という幕藩制の在地構造の変化がある、というのが丸山氏の所論である。交通史研究の分野では、その後、土田良一氏が公儀の郷帳や助郷帳をもとに五街道の宿駅尾称の変化を調査され、享保一〇年に助郷帳記載の宿駅尾称が「町」から「宿」へ変化する、また宿駅が存在する年貢負担単位の呼称が「宿」に変化するのは武蔵はじめ六ヶ国が主であることを明らかにされている。^(注6)丸山・土田両氏は、宿駅の行政単位(年貢負担単位)の呼称変化を把握しようとするものであり、特に丸山氏は、その当時の研究段階のいわゆる幕藩制構造論から呼称変化を説明する、すぐれた見解と思われる。それに対して本稿では、在方町の一類型である宿駅が「町」と呼ばれることの地域社会内での意味を考察しようとするものであって、丸山氏とは全く異なる視点からのアプローチであることを確認しておきたい。

第二に、近年の役Ⅱ身分論のなかで、在方町の呼称が言及されている。吉田伸之氏は、町人身分論の観点から、近世初期の「宿Ⅱ村方」の年寄クラスは町人身分もしくは町人身分に類似する身分として扱われており、全国的横断的な町人身分が存在した段階があったとして、宿駅の呼称としては町から宿への変化を予想している。^(注7)これに対して、

深井甚三氏は、加賀藩地域の城下町・在方町の分析から、町呼称・町役負担・町人身分の三者は必ずしも一致しない、と吉田氏を批判している。^(注8) 本稿はもとより近世初期に言及するものではないが、宿駅の伝馬人足役負担者はあくまで百姓身分であること、また宿駅の年貢負担単位の呼称は、村・町・宿、その他多様であつて、本稿で分析しようとしている町呼称は身分とは直接関係しないことをお断わりしておきたい。近世の在方の地域社会のなかで、「町」と呼ばれる社会集団があつたとすれば、それはどのような意味においてであるかということを本稿は考察しようとしている、ということに課題を限定したい。

第三に、近年の地域社会論の展開とのかかわりについて述べなければならない。本稿と密接に関わりを持つ成果のみに言及すると、まず本稿の対象地域に隣接する地域の水利組織について分析した石原佳子氏の論文がある。^(注10) ここにおいて既に、畿内の水利組織の中世からの継承と近世初期の領主・公儀による編成がえを跡付け、自律的側面の強い水利組織と権力による編成の側面が強い水利組織の二類型が存在し、前者は民衆の前進と評価しうるものであると同時に、権力が河川管理のために依拠しようとするものであつたとしている。次に重要な論文は、本稿と素材を共有する村田路人氏の研究である。^(注11) 村田氏は治水・水利普請を素材として役の問題から地域を照射している。その基本的主張は、近世初期に中世の自律的秩序を編成した役の秩序が前期になると動揺する、そのことを地域の成長として評価する、というものである。これについては、吉田伸之氏や大塚英二氏の批判^(注12) があり、本稿は、「役的編成」の理解や水利争論の事実関係については村田氏の成果を受け継ぎ、観点としては吉田氏・大塚氏の指摘をふまえて、在方町からみた地域の秩序変容の問題を明らかにしようとするものである。このことは近世における地域の研究のここ一〇年の展開の上に現在課題とされている、地域研究における町場分析の欠如という問題^(注13) に、一石を投じるものである。

おそらく地域社会論の中に、唯一、在方町を取り込んだものとして貝塚和実氏の報告がある。^(注14)もとより貝塚氏の研究は広汎な論点を有するが、その中で近世における地域社会の一定の自立性を強調しつつ、一六九四（元禄七）年武蔵国横見郡で郡内の一一か村に対して課された鴻巣宿の助郷役を「郡中」として郡全体で負担している事例を挙げている。しかし、討論中の平川新氏の発言にもみられるように、貝塚報告のなかでの宿駅の例は、地域社会にとって「幸福」な珍しい例であつて、むしろ一般的には本稿で取り上げる事例のように、地域社会が宿駅を中心とする権力的な地域によつて秩序変容を余儀なくされると考えたほうがよい。

最後に矢田俊文氏の研究に言及する。^(注16)矢田氏は北陸地域の近世初期の本願寺教団の裏書という支配系統で授受される文書とは異質の文書の分析から、在方町が公儀の郷帳などでは村とされているのに対し、裏書では町とされていることを見だし、それを「民衆の地域認識」と評価している。この視点は本稿にとつて大変示唆的であり、支配レベルの呼称とは異なる民衆レベル、社会集団レベルの呼称が存在することに留意しつつ、分析を行なつていく必要がある。^(注17)ただし、支配系統で授受される文書にも多様な呼称が出現することをここで先取りになるが述べておきたい。そして、多様な呼称がなぜ現われるのかということが実は最も重要なのである。

以上、本稿の課題にかかわる過去の研究を概観することによつて、これから分析する在方町の呼称が、どのような意味において取り上げられようとしているのか、明確になったものと思われる。以下、一章では守口とその周辺地域の特質について概観し、二章では支配との関係での呼称の変化を村と宿駅の二系統に分けて明らかにする。以上を前提に、三章では水利争論や議定という地域社会内の対立や結合の諸関係のなかでの守口の多様な呼称の意味について分析し、四章では元禄・享保期の助郷編成による地域秩序の一定の変容を述べ、最後の五章では守口における村方騒動の分析を通じて守口内部の階層と地域社会の関係について言及する。

一、守口とその周辺地域の概要

さて、本論に入る前に、予備知識として在方町守口と守口が属する地域の実態を概観しておきたい。第一に、守口は大坂の一つ手前の東海道の宿駅である。人足役のみ一〇〇人という負担をしている宿駅であつて、伝馬役が存在しないという意味では宿駅としては特殊性を持つ。馬継ぎは大坂一枚方間で行なわれていたのである。^(注18)しかし、おそらくそれがゆえに地子免許が一七世紀後半になつてから与えられるという事態を生み、呼称の問題を考察するのに適切な素材を提供してくれることになる。戸口規模はあまり大きくなく、一七四六（延享三）年で八一三人、一七五七（宝暦七）年で二〇二戸八三六人という数字から、近世前期では八〇〇人二〇〇戸程度と推測される。また、後掲の史料2傍線部から推測されるとおり、京坂間の商品流通ルートはもっぱら淀川舟運に担われており、さらに市が存在した形跡もない。守口の構成員の職業については一八四二（天保一三）年のデータながら記しておけば、一七七戸（本百姓六一戸と無高水吞一二戸―史料上の数字のまま）のうち「諸商内諸職人」四七戸「旅籠屋渡世」二二六戸と、非農業の職業が天保期でも半数を超えない。^(注20)以上のことから、在方町守口は地域の商品流通の拠点（在郷町）としての性格は希薄であつて、純粹な宿場町であるという性格づけを行なうことができよう。^(注21)また、守口は村としては、一七六八（明和五）年明細帳によれば、田高三四一・六五三石、畑高六六・八九五石、屋敷高二〇・九四七石という村高の構成であり、下尿・干鰯・油粕といった購入肥料を用いた米と木綿の生産を行なつていた。^(注22)なお、守口は近世を通じて幕府代官支配地であつた。

第二に、守口周辺地域について述べておきたい。この地域は、淀川下流の左岸に位置し、低湿地であつた。そのた

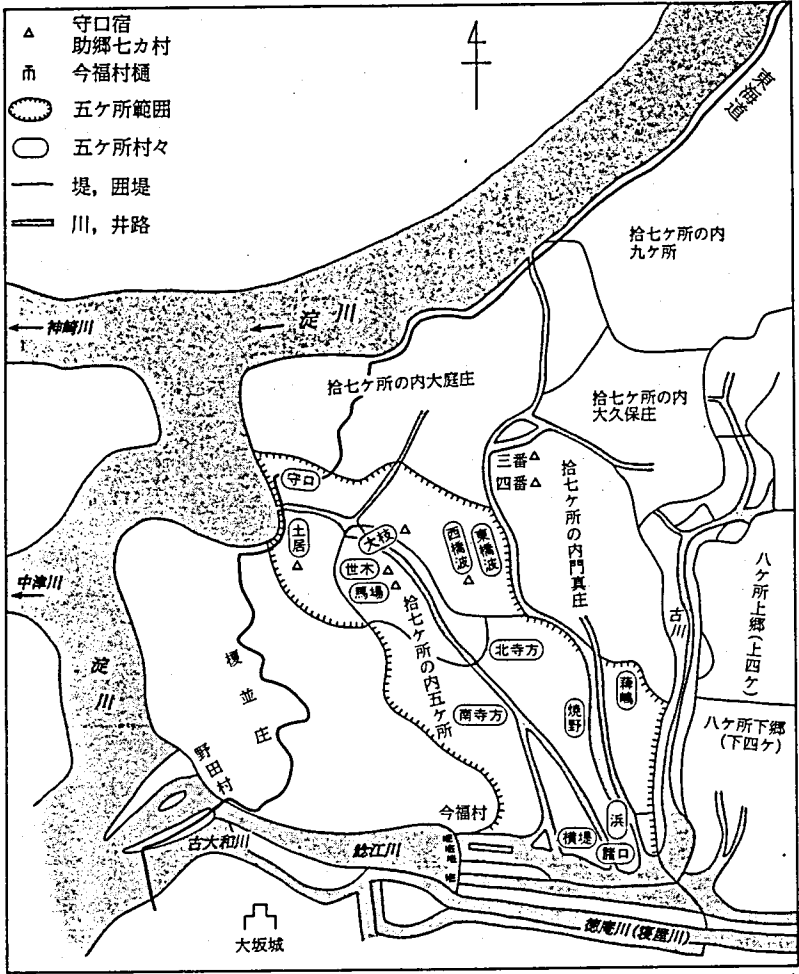


図1 河内国茨田郡五ヶ所および周辺図(18世紀初期)

『岩波講座 日本通史』12(近世2) 351頁の図1を転載

め、防水・排水が地域の主要な課題であり、一つないし複数の集落を堤によって囲んだ防水・水利組織が成立し、それらの地域結合が中世段階より形成されてきた。その構成は、図1・2に示される通りである。このうち茨田郡八ヶ所という地域結合は一四〇八（応永一五）年を初見とし^(注23)、茨田郡十七ヶ所も含めて「主として排水を中心とした水利共同組織体」が、その成立は不明ながら中世末にはすでに形成されていたと考えられている^(注24)。さらに、この地域の神社祭祀の結合は囲堤を単位とする結合とはほぼ一致している可能性^(注25)がある。なお、言うまでもないがこの地域の支配は幕府領と私領が錯綜するいわゆる非領国地域であったが、大

近世の地域社会と在方町（渡辺）

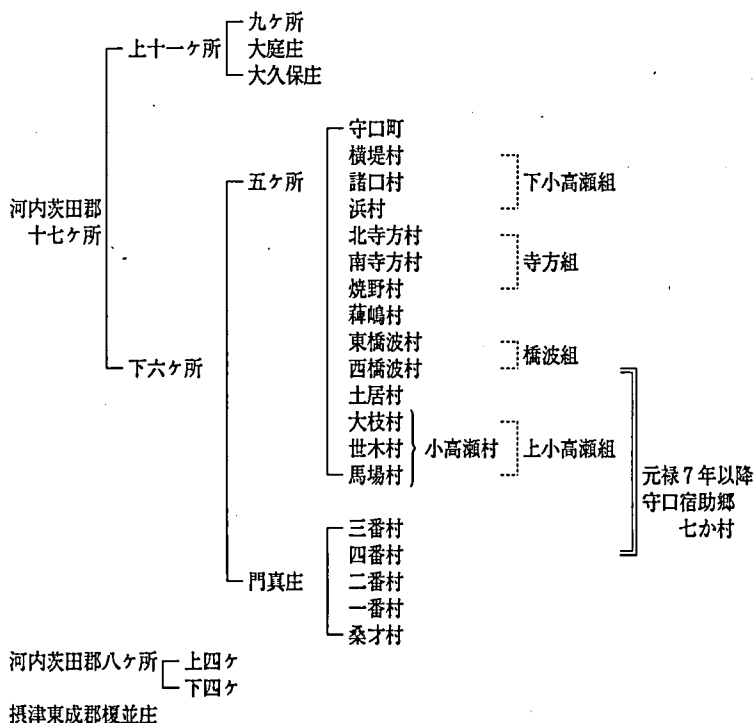


図2 淀川左岸地域（摂津・河内）の構成

村田論文の図2をもとに作成、なお五ヶ所内の組については一部推定を含む。

坂城に近接し幕府領が多く、幕府の領国的性格を持つ地域であつた。^(注26)

また、この地域の農業生産の特色としては、享保期にはすでに商品化された米と木綿の生産地になっていたことが挙げられる。

〔史料1〕^(注27)

乍恐口上書を以奉願上候

河州

茨田郡
鎌倉郡

摂州東成郡

九拾二ヶ村百姓共二而御座候

一近年御公義様御慈悲之御政道二而、米穀も下直二罷成候御儀、諸民難有奉存候御事

一惣而古来々諸色相場之義、米穀之直段二准シ高下御座候処、当時米穀作物ニかきり格別下直二而、其外万物直段高直二而、不相応仕候故、当作方之仕入以之外難儀仕、百姓相続仕かたく奉存、御願申上候御事

一貞享年中米穀直段と只今米穀直段御同事二御座候、然共貞享年中より只今ハ諸式農道具・こやしノ類共、式割半と三割余迄高直二御座候御事

一惣而商人・職人、別而干鰯・油粕・下屎中買等者、中間御座候得ハ、おのつから直段高直二仕候、百姓者中間と申義無御座候、耕作こやしの儀ハ、土地相応ニ手ニ入来り候故、時節ヲ考、問ぬけ候而ハ、作りも出来おとり申候ニ付、我一二高直二ても買取申候、就中米穀并木綿諸作物、百姓方々売払候砌ハ、御年貢上納之節ニて御座候へハ、諸商人売払時節ヲ考、存之儀ニ直段引さけ買申様ニ罷成仕方、是等目前之損失ニ御座候得共、御年貢御上納日限遅滞仕かたく、下直ヲ不願、売払申候、ヶ様之義ハ御上ニ御存知無御座候御事ニて、百姓之内損ニて御座候、然処ニ益當時こやしノ類・農具其外百姓第一ニ可用諸色格別高直二御座候而、百姓日々ニ衰

へ、こやし并田畑之修理もおこたり、おのつから御公義様御物成も減少仕、百姓立行かたく、迷惑ニ奉存候、乍恐御救ヲ以、百姓耕作相統候様ニ御慈悲之吟味被為成下候者、普ク百姓難有可奉存候、以上

享保八卯八月

榎並庄廿五ヶ村

八ヶ庄拾九ヶ村

五ヶ庄拾六ヶ村

門真之庄五ヶ村

大庭大久保庄拾六ヶ村

九ヶ庄拾一ヶ村

右村々連判

御奉行様

これは、米価の維持を求める広域訴願運動の存在を示すものであるが、干鰯・油粕・下屎といった購入肥料を用いた米と木綿の商品生産がこの段階ですでに広汎に行なわれていたことがわかる。ちなみにこの広域訴願が上述の水利組合を単位として行なわれていることは注目しておいてよい。^(注28)さらに、大坂近郊農業として低湿地に適した蓮根などの生産もさかんであったことがいわれている。^(注29)ただし、これら商業的農業の展開は守口の都市的發展をもたらさず、それぞれの農民が大坂と直結して商品生産を行なっていたものと思われる。

二、在方町守口の二系統の呼称の変化

まず第一に、守口の村としての呼称がどのように変化したのかを、年貢割付状・皆済目録から探ってみたい。^(注30)年貢割付状の一六七三(延宝元)年から一六九〇(元禄三)年まで、冒頭の村高記載の下に「守口村」と書かれている。ところが、一六九八(元禄一一)年になると表題に「河内国茨田郡守口町当寅御年貢可納割付之事」とあり、また宛先も「河内国守口町庄屋年寄惣百姓」となっている。以後割付状の様式に様々な変化はあるものの、現存割付状の表題もしくは宛先は悉く「守口町」となっており、一六九〇年から一六九八年の間に守口の村としての呼称が「村」から「町」に変化したことは確かである。この変化は何を契機として発生したのだろうか。推測の根拠となる事実を三つ以下提示する。①一六九〇(元禄三)年までの割付状では引き高は主として「旱風水損」であるのに対し、一六九八(元禄一一)年以降は引き高のなかに「町居屋敷五千歩引」二〇石が含まれるようになる。^(注31)②一六九三(元禄六)年二月、代官森本惣兵衛より地子免許と問屋給米下付が伝達されている。^(注32)③一六九三年八月「御物成皆済之事」(年貢小手形か)の宛先は「守口村」である。^(注33)したがって、①・②より一六九三年地子免許を契機に、同年八月以降村としての呼称が「守口村」より「守口町」に変化したことが推測される。なお、皆済目録については一七二二(享保七)年以後の残存のため、当然、差出しなど全て「守口町」となっている。また、一六九七(延宝七)年検地帳の表題では「守口村」、一七二七(享保二二)年流作場検地帳表題には「守口町」とあり、^(注33)上述の呼称変化を裏付けている。

第二に、宿駅としての呼称の変化を検討したい。

〔史料2〕^(注34)

乍恐御訴訟申上

森本惣兵衛殿御代官所河州茨田郡

問屋
年寄 与次右衛門

同 (ママ)
門九郎兵衛

一守口宿之義東海道御伝馬宿並二人足役相勤申候、先年ハ陸地往来之旅人多ク、泊・昼休之旅籠など仕候二付、ケ様之余力を以人足役之者百人余御座候而、御役無恙相勤申候、然所ニ近年淀川表ニ新三拾石と申小船出来仕、昼夜を不限旅人此舟は大坂ヲ淀・伏見迄通路仕候二付、陸路往環之旅人只今ハ曾而無御座候、宿中之者渡世送り兼、人足役之者共次第減り、只今漸く五拾人余ニ而御役相勤申候、然共大坂御番代様・御大名様方御通之節は、近在他村馳廻り人足雇御役相勤申候、御定之賃錢大分之増錢ヲ仕雇申候、依之宿中困窮仕過半潰レ申候、此段御通り之殿様方御覽被遊候通先年之家数減シ、町並明屋敷数多御座候、其上殿様方御通り之時分ハ、御上り下り共二大坂・枚方ヲ申来候、御下りハ定而御船ニ而御通り可被成と奉存候得共、自然陸路通人足手問申候得は如何ニ奉存、舟ニ而御通ヲ見届候迄は、問屋方ニ御触之人足待せ置申候、ケ様之費迄毎度御座候得は、植付時分又ハ立毛刈込之時分ハ農業之障別而迷惑仕候、此度永井伊賀守様御上ケ知御藏入ニ罷成、守口近在御藏入多ク罷成候二付、助人足郷ニ奉願上候、御慈悲ヲ以助郷御付被下候ハ、御役無恙相勤可申と奉存候、乍憚高付ケ村書・道法付別紙差上申候御事

一守口宿之義度々宿並之御救拝借米金、其上毎年御米拾四石五斗二升八合宛、人足役之者共ニ先年ヲ被下置難有奉存候、御条目之通毎日問屋方ニ昼式人・夜四人相詰罷有候、然共御用ニ右之人數ニ而は相勤り不申候二付、増人足差置申候、先々奉願上候人足役地子御赦免、問屋料相応ニ被為仰付被下候ハ、難有可奉存候御事

一守口宿御物成米三分一ハ御直段銀納残りは御蔵詰仕候、三分一御直段相御蔵詰人用困窮之者共難義仕候間、枚方宿並ニ所払ニ被仰付被下候様ニ奉願上候御事

右之趣乍憚被為聞召上、人足助郷被為仰付被下候ハ、御役無恙相勤可申と雖有奉存候、東海道御役宿五拾八宿之内人足役計相勤申候ハ、橋本宿・守口宿ニ而御座候、橋本宿ハ八幡宮御赦免地本郷七千石程御座候ニ付、人足不足之時分は先年々本郷大助相勤候様ニ承及候、守口宿之義ハ只今迄御代官一所之助郷茂無御座候、其上田畑之義ハ、水揚・外嶋多ク御座候而一入困窮仕候、此度近在ニ御蔵入多ク罷成候ニ付、乍恐御訴訟申上候、哀御慈悲ニ願之通被為仰付被下候は、^(△△)難有可奉存候以上

貞享五辰年三月

河州茨田郡守口宿 印

御奉行様

この史料は、守口の困窮状況を訴え、守口宿に助郷を付けること、人足役の反対給付として地子を免除すること、問屋料を下付すること、隣宿の枚方宿同様に物成米の所払いを許可すること、以上四点の宿駅助成策を求めた願書である。差出しは「守口宿」と記されている。本文中も一貫して「守口宿」と記しており、しかも自らの集団の表現は「村中」ではなく「宿中」である。また、この願書の作成者は冒頭にあるように、年寄兼任の間屋と年寄の二名であった庄屋の署名がない。内容的にも既述のように村ではなく宿駅に関する事柄であるので、この史料の「守口宿」という呼称は守口の宿駅としての呼称であることがわかる。

以下同様にして守口の宿駅としての呼称を調べていくと、守口からの一六九〇（元禄三）年の定助郷願いを代官が勘定所に伝達した史料でも「守口宿」と呼ばれている。ついで、一六九二年に勘定所から代官へ地子免許・問屋給米下付などを指示した史料では「守口町」と記され、代官より守口あての同史料の奥書では「守口宿」となっており、^(注36)

^(注35)

この史料では呼称が一致していない。勘定所と代官で呼称が違う理由は不明である。但し、代官の方がより地域の実状を把握していると思われるので、この段階では守口は宿駅としては「守口宿」と呼ばれていたと判断して差支えないであろう。

ところが、一六九四（元禄七）年二月の助郷帳写では道中奉行よりの宛先が「守口町」となっており、この呼称は一七一六（享保元）年の洪水につき困窮拝借願いと、一七二五（享保一〇）年八月二三日の助郷争論決着の請状、同年一〇月助郷争論訴願状、^(注40)同月道中宿々勤方定書につき伺書の三点の史料で差出しとして出現している。第二段階として「守口町」と呼ばれていた時期が存在する。

呼称はさらに変化する。一七二五（享保一〇）年一月助郷帳では「守口宿」とされ、以後、守口自らも宿駅としては「守口宿」と称するようになり、幕末まで「駅」が時折見られることを除いては、^(注43)基本的に変化しない。

以上をまとめると、守口の宿駅としての呼称は一六九四年以前は「守口宿」、一六九四年以後は「守口町」、一七二五年以後は「守口宿」と変換し、呼称の確定を見る。一六九四―一七二五年の「守口町」は村としての「守口町」と同様に地子免許と関係あるのだろう。

つまり、守口という同一の集団には二系統の呼称の変化が見られるのである。それは守口には村と宿駅という二つの機能が存在するからである。そして、この二つの機能のそれぞれに応じて組織が存在した。つまり、村であれば「庄屋―年寄―百姓」、宿駅ならば「問屋・本陣―年寄―公事人（人足役負担者）」という二系統の組織が存在した。庄屋と問屋が別の人格であることと宿役を負担しない百姓の存在を除いては、ほぼ同一の構成員が目的の異なる集団を形成していると考えることができる。たとえば、庄屋と問屋が同一人物であったとしても、村と宿駅という二つの組織を弁別することは可能である。^(注44)したがって、その組織に応じて異なる呼称が付与されることがありうるのである。

こうした呼称はどのような過程を経て確定されるのか。それは、守口という集団の自己表現がまず先行して、それを幕府が認めていくという過程が存在する。また、こうした呼称はあくまで、守口という集団の自己表現が権力によって確定されているだけであって、地域社会のなかでその呼称が用いられるかどうかはまた別個の問題である。この二つの問題をこれから検討していきたい。

三、争論・議定のなかの守口の呼称

本章では、前節でみた、公儀・領主との関係での守口の二系統の呼称変化を前提的な知識として、守口が所属する地域社会のなかで守口が自己をどのように表現し、また地域の他の集団が守口をどのような場面でどのように呼ぶのかを、水利争論や議定のなかから探ってみたい。

(1) 水利争論における守口の呼称変化

まず最初に、一六八四（貞享元）年に悪水落ち、（注45）鯉江川堀り人足負担をめぐって五ヶ所および門真庄と守口との間の争論を瞥見してみよう。

〔史料3〕（注45）

乍恐口上書

一 今度鯉江川之義二付八ヶ所拾七ヶ所村々口上書差上被申候二付、守口村も加判仕候様ニ被申候、守口村八人足役相勤申候二付、宿役御用之外諸役御赦免被為成被下候二付、前々鯉江川さらへ人足并懸り銀も出し不申

候、然ニ此度村々を差上被申候口上書ニ鯰江川さらへ人足并懸り銀村々並ニ出し申様ニ認被申候ニ付、加判仕候義乍憚難成奉存候ニ付、御断申上候以上

貞享元年子七月十一日

河州茨田郡守口村

庄屋 九郎兵衛 印

年寄 喜七郎 印

同 八兵衛 印

堤御奉行様

この史料は茨田郡八ヶ所と茨田郡十七ヶ所の組合村々が鯰江川（図1参照）普請費用を守口も「村々並ニ」負担することを求めてきたことに對して、拒否する旨を堤奉行に回答しているものである。その負担回避の論理は「守口村ハ人足役相勤申候ニ付」というように宿役を勤めていることであつた。ここでは差出しが「河州茨田郡守口村庄屋九郎兵衛」ほか年寄二名であり、また本文中でも二ヶ所で「守口村」と記されている。次にこれに對して再度下六ヶ所（五ヶ所と門真庄）の村々が代官あてに提出した訴状を以下に掲げる。

〔史料4〕^{〔注47〕}

乍恐御訴訟申上候

私共ハ河州十七ヶ所之内下六ヶ村之庄屋ニ而御座候^{（ママ）}

一 摂州矢部榎並庄河州茨田郡八ヶ所拾七ヶ所三嶋惣高四万七千石余、惡水落鯰江川今度今井七郎兵衛様を急度川掘可仕旨被為仰付候ニ付奉畏、七月四日川堀仕候処ハ、榎並庄一万四千八百石ハ様子御座候而先年無役ニ而御座候故、人足耆人も只今迄出し不申、入用とても同前ニ而御座候御事

一殿様御下守口村^ら川堀人足出し申様ニと催促仕候得共、御役御赦免之村之由ニ而人足出し不申候、尤御公儀様役儀ハ御赦免にても可有御座候へ共、鯰江川之儀ハ自分之田地水落之儀ニ御座候処、人足^(破損、不申力)也人も出し□□我ま、申迷惑仕候御事

一鯰江川之儀ハ人足入用何程御座候而も、八ヶ所より半分仕候、残半分式ツ割、上拾壹ヶ所より半分、下六ヶ所より半分仕候、夫故下六ヶ^(ママ)纔之内ニ而守口村之役儀相并申事迷惑ニ御座候、如先年守口村江も無相違役儀仕候様ニと催促仕候へ共、只今無役と申人足出し不申候処、今井七郎兵衛様被為成御意候ハ、干水之時分川堀勝手も能有之候間、急ニ川堀仕廻候様ニと被為仰付候故、川堀之儀ハ四日迄下六ヶ組中として先仕立申候人足代割高銀被為仰付可被下候御事

右之通何角我ま、を申剩此度大和川まきあけ砂堀のけ申人足迄出し申間敷由被申、御普請手つかへニ罷成迷惑至極仕候、御慈悲之上被為聞召上守口村庄屋年寄被召出、向後無義鯰江川相応之役義仕候様ニ被為仰付被下候ハ、^(ママ)下六ヶ普百姓難有可奉存候以上

貞享元年子八月十四日

豊嶋権之丞様

横堤村	諸口村	浜村	小高瀬村
北寺方村	南寺方村	焼野村	薗嶋村
桑才村	一番下村	同上村	二番村
三番村	四番村		
東橋波村	西橋波村	土居村	

この史料のなかでは、傍線部のように役免除の村であっても「自分之田地水落之儀」つまり守口の耕地の排水は問題になっている鯰江川に排水されることを根拠として、守口の負担免除を否定しようとしていることが注目される。ま

た、ここでは本文中四ヶ所で「守口村」と記されており、この争論では守口自身も、守口と対立している村々も守口を「村」と表現していることがわかる。なお、この争論は貞享四年の史料5傍線部aにより守口の主張が貫徹したものと見られる。

次に、一六八七（貞享四）年の今福村悪水出し樋（図1参照）伏せ普請人足入用負担をめぐる五ヶ所との争論がある。二月の横堤村以下一カ村（守口以外の五ヶ所村々）よりの代官宛訴状は、全文の引用は省略するが、やはりここでも水利普請の負担を守口に求めている。そして、例えば「守口村ニハ樋伏替御普請人足入用等出入間敷由俄ニ新儀をたくみ被申」という部分を始めとして合計五ヶ所で「守口村」と記している。この段階では、二章でみたように守口と領主の間でも呼称は「守口村」であるので、水利負担争論の相手の村々が「守口村」と呼ぶのは当然といえる。これに対する守口の返答書を提示したい。

[史料5]^(注48)

乍恐返答書を以言上

御下守口村庄屋年寄共ニ而御座候

一 撰召今福村領ニ御座候河州茨田郡之内五ヶ所之村々悪水出し樋之儀ニ付、右組中御訴詔被申上御裏判頂戴仕候、右悪水樋朽損シ申ニ付、従御公儀様伏替樋被為仰付、当春御普請御座候、就其樋伏人足守口村よりも村並二人足出し申様ニと新規成儀を被申掛迷惑ニ奉存候、守口村ハ先年右樋戸前度々御公儀様御伏替御座候節も人足老人に而も出し不申、勿論入用等少茂出し候例無御座候、尤鯰江川堀普請并藻かり人足も出し申儀無御座候、去比鯰江川普請之時分も新規成儀をくわたて、御代官様方迄被申上候へ共、人足出し候先例無御座候、其上守口町之儀者東海道宿諸役相勤申候故、か様之人足出し不申儀何茂乍存知、又候我儘成横道被申上迷惑ニ

奉存候、乍恐只今迄之通ニ被為聞召分可被下候御事

(貞享二年)

一去ル丑冬右惡水樋御伏替之義可奉願と書付村々へ相廻リ候ニ付、村々一同ニ守口村も加判仕候、然上ハ此度樋伏人足出し申筈之様ニ被申上候、近比難心得被申上様ニ奉存候、守口村惡水も落申候上者御願不申上候而ハ不罷成儀与乍憚奉存候、御願相叶候上ハ、先年度々樋戸前仕直シ之節人足割符之通ニ可被致筈ニ奉存候御事

一右惡水樋守給米之儀被申上候、此義ハ各別成儀ヲ被申上候、其子細者今福惡水樋あけ申刻限樋守方ニ手形を取、其手形を以守口村領内之惡水大枝村境中樋をあげ水落申候、其給米ニ先年ニ遣シ申候得者、今以其通ニ御座候、縦此給米出シ不来候共、樋伏人足并入用等出シ来候ハ、困窮之村ニ而御座候得者例をかき候儀ハ罷成申間敷候間、村々一同ニ可罷成候処、其例只今迄無之候故、此度之御訴狀ニも先例在之候との儀ハ不被申上候御事

右之趣被為聞召上先規之通被仰付被下候ハ、難有可奉存候、守口町之義ハ少高ニ而宿役御用ニ昼夜ヲ不限御継飛脚大分之人足役相勤申ニ付、宿役御用之外御公儀様御役義其外郷人足之役義不仕候而も宿役御用勤兼迷惑仕候ニ付、助郷被仰付被下様ニと度々御訴詔申上候程之義ニ御座候へハ、何分ニも村相続仕候様ニと奉願候以上

貞享四年卯二月廿八日

守口 庄屋 八兵衛

同 年寄 九郎兵衛

同 半右衛門

同 源兵衛

同 与次右衛門

同 惣百姓中

森本惣兵衛様

この返答書の差出しでは「守口村庄屋八兵衛」ほか年寄四名であり、また冒頭の「御下守口村庄屋年寄ニ而御座候」

以下六カ所で「守口村」と記しており、一六八四年の時と変わらず、基本的には「守口村」という自己表現である。しかし、「守口町」との表現も波線部①②の二ヶ所存在する。これらはいずれも負担回避の理由付けとして宿役を負担していることを述べている文脈であり、「守口町」という自己表現が初めて登場したと位置付けられる。また、傍線部bで水利負担争論と並行して助郷要求が出されていたことが判明するのは注目される。翌一六八八年には宿駅として助郷下付・地子免許願いを提出しているからである。このことの持つ意味については四章で述べる。

守口と水利組合の争論のうち、史料に即して呼称が検討できるものは、やや時期が下つて一七一六（享保元）年のことになる。

〔史料6〕
（注49）

乍恐以書付奉申上候

一今度野田村堤態切之場所築留二付、杭木・空俵・葉竹・人足差出候様二五ヶ所拾四ヶ村へ之廻状奉拝見仕候、
守口町之儀五ヶ所組内御座候へ共、先年人足・諸事掛り物等出し不申候二付、乍恐御断申上候以上

享保元年申七月十五日

河州茨田郡守口町

年寄

善右衛門

同

九郎兵衛

同

平 七

御代官様

このように「守口町年寄善右衛門」ほか二名は、野田村態^{なま}と切場^{きりば}所復旧費用について「守口町」は「五ヶ所」水利組合のメンバーであるが、先年から「人足・諸事掛り物等」は出していないと代官に述べている。この史料の別の写には^{（注51）}

「右之書付郷八様へ差上、人足等遣し不申候」と書き添えられているので、この書付に述べられた通り人足を差し出さなかつたことがわかる。ここでは本文中に「守口町」とあるほか、差出しの肩書きでも「守口町」と「町」に統一されている。これは二節で明らかにしたとおり、一六九三年に村としての呼称が「守口町」となったことが反映されていると考えられる。

しかし、「守口町」という呼称が、あらゆる社会集団によつてすぐに用いられるようになったわけでは決していない。一七二七（享保一二）年、悪水井路渡人足負担をめぐる五ヶ所を含めた六つの組合村と守口との争論の史料にそれが現われている。

〔史料7〕^(注52)

乍恐以書付御願申上候

一私共組合五ヶ所之内守口村高四百石余宿役相勤申由二而、悪水井路渡人足諸入用等出し不申、尤宿役之儀八年々外二御用捨も有之、殊二諸役御赦免之御朱印も無之由二候へ共、宿役を申立我儘二諸役相勤不申候、兎角地方之儀各別二御座候間、外村並二相勤被申候様二被為仰付被下候様二奉願上候以上

享保十二年未十月

五ヶ庄拾三ヶ村惣代大枝村	庄屋	清兵衛
同所 横堤村	庄屋	四郎兵衛
門真五ヶ村惣代三番村	庄屋	市左衛門
大庭大久保庄拾五ヶ村惣代十番村庄屋	新	助
榎並庄廿五ヶ村惣代江野村	庄屋	十右衛門

齊藤喜六郎様

御役所

同所 別所村

今津村放出村惣代今津村

庄屋

庄屋

小左衛門

庄屋

金兵衛

如是訴出候、内々ニ而可相濟事ニ候ハ、可埒明、滯子細有之者致返答書、来ル廿一日我等役所江可罷出、於不參者可為越度者也

未十月八日 齊藤喜六郎

守口宿

庄屋

年寄

「悪水井路」の浚人足と諸入用を守口が出さないことを、五ヶ所・門真庄・大庭大久保庄・榎並庄の村々と今津村・放出村が代官に訴え出たものである。宿役を勤めていることを理由として負担を回避しようとする守口に対して、「地方之儀」は別個の問題とし水利組合の他の村々と同様の負担を守口に求めている。ここで、水利組合の側は、守口の地域のなかの一つの村という属性を強調し「守口村」と記している。これに対する守口の返答書を次に掲げる。

〔史料8〕^(注53)

乍恐返答

御下河州茨田郡守口町之者共ニ而御座候

一 摂州今福村領ニ御座候立合悪水樋ニ付、人足并掛り銀等之儀此度右村之高三万石余惣代ニ而、私共村方へも新規ニ入用懸ケ可申由御訴訟被申上、御裏判頂戴仕候御事

一 守口町之儀五ヶ所拾四ヶ村組合ニ而ハ御座候得とも、纔之宿高四百石之小宿ニ而往還御用相勤申候ニ付、凡百余年余已前元和七年諸役御赦免被為成下、夫々諸高役相勤不申候、既ニ四拾壹年以前貞享四卯年森本惣兵衛様御

近世の地域社会と在方町（渡辺）

代官所之節、右五ヶ庄村々々御訴訟被申上、双方被為召出御吟味之上、往古々悪水井路諸入用等出し不申候儀、紛無之段被為聞召上、先規之通ニ被仰付、其後万年長十郎様御代官所之節も御吟味之上、以後申分無之ためにと御座候而、立合樋帳又ハ樋御普請願帳坏之村書之上ニ、右立合ニ而ハ候得共、前々々人足并諸事掛り銀等出し不申候と申訳書記させ、其上ニ而印形仕候様ニと被仰付、只今迄其趣書記申候、則此度立合門樋御普請願上候村々連判之書付ニも右之趣書記指上申候御事

右之通少茂相違不申上候、悪水井路浚人足・樋御普請人足并諸掛り、往古々出し不申訳五ヶ庄組合村々委細存知居被申、今以守口町我儘申入用等出し不申旨新規ヲ被申掛候段、不届千万奉存候、乍恐被為聞召上以来ケ様之族不申懸候様、前々之通被為仰付被下候様ニ幾重ニも奉願上候以上

享保十二年未十月廿一日

守口町庄屋

七郎兵衛

年寄

利助

同

源兵衛

齊藤喜六郎様

御役所

ここでも守口は負担を拒否している。史料に即して説明すれば、守口は五ヶ所水利組合のメンバーであるけれども、一六二二（元和七）年に諸高役免許とされており、一六八七（貞享四）年の争論―史料5の争論―では「悪水井路諸入用」を負担しなくてよいとの裁定が下され、万年長十郎が代官の時には諸帳面を作成して負担免除を確認している、ということである。呼称について確認すると、この史料ではまず冒頭で返答主体を「守口町之者共」と宣言し、以後本文中二ヶ所とも「守口町」と記し、差出しの肩書きも「守口町庄屋」となっている。このように、相手村々が守口を「守口村」と記すのに対して守口自身は負担拒否を代官に回答する文書で「守口町」と記しているのである。

なお、史料7の奥書で代官が宛先を「守口宿」としているのは、本稿のこれまでの説明と反する。つまり、問題になっている事柄が守口の村としての側面にかかわるものであるがゆえに、宛先が守口のなかの間屋ではなく庄屋・年寄になっているのだから、この時期の呼称の原則からすれば「守口町」でなければならぬはずである。このことは一七二五（享保一〇）年に下付された助郷帳で「守口宿」と記載されたことが影響しているとりあえず推測しておきたい。助郷帳は代官を通して下付されるからである。同様のことはもう一点の史料でも見られる。一七二七（享保一二）年十一月四日付けの、悪水井路渡人足を守口が負担しない旨の裁定を争論の双方の当事者が請けた史料^(注54)では、守口は合計四ヶ所で「守口宿」と記載され、請印の署名も「守口宿庄屋七郎兵衛」とある。交通にかかわらない場合での「守口宿」という表現については、次節で述べる助郷の「地域」設定と関連するのであろう。

一七三五（享保二〇）年の争論も呼称については一七二七年の争論（史料7・8）とほぼ同様である。野田村堤態切場所修築のための土俵・人足の負担について、五ヶ所・八ヶ庄・榎並庄・大庭庄・九ヶ所の五つの水利組合は七月二四日に堤奉行あての訴状^(注55)を提出している。これは前回の争論同様、守口に土俵・人足の負担を求めたものであり、その立場から水利組合側は守口を「守口村」と呼ぶ。この論理は、訴状のなかに「地方損亡之義ハ外村々同事之義ニ奉存候間、右村々同様ニ土俵・人足相出し申候様ニ被為仰付被下候ハ、」とあることに表されている。つまり、守口が「外村並ニ」あるいは「外村々同事」という地域の水利秩序のなかの一つの村であるという主張が、これらの訴状の基調である。したがって、こうした守口周辺地域の水利組合の論理が「守口村」という呼称を必然化するものと思われる。

この訴状に対する守口の口上書は八月二日に代官石原清左衛門宛てに提出されている。^(注56)そのなかで、「守口町之義ハ前々々惣而人足・諸事掛り物等出し不申候訳書物之写四通差上申候」というように、自らを「守口町」といって

る。なお、水利組合からの訴状の奥書では堤奉行久下藤十郎よりの宛先が「守口村庄屋年寄」となっている。これも享保一〇年の訴状奥書同様、この時期の呼称の原則からはずれるが、なぜ堤奉行が「守口村」とするのかは今のところ不明といわざるをえない。

以上のことから、享保期の争論においては、守口の自己表現としての「守口町」と、水利組合の「守口村」という呼称は対抗関係にあると把握できよう。貞享期の争論史料と比較した場合のこのような自己表現の変化は、既述のように、一六九三年の地子免許を契機に遅くとも一六九八年以降は村としては「守口町」と称されるのが、少なくとも領主との間では原則となったことによるものと思われる。ただし、注目しておくべきは、領主との間で「町」呼称が確定する以前の「一六八七（貞享四）年の争論ですでに守口は萌芽的に「町」呼称を用いているということである。それは、地域における水利負担をめぐる争論のなかで、宿役を勤めているがゆえに水利負担が免除されるはずという強烈な自己主張をしているためであらう。つまり、この地域の他の村々とは異なった集団であることの表現として「守口町」という呼称が部分的に使用され始めたものと考えられるのである。

ところで、対象としている地域の水利負担をめぐる争論を本稿で取り上げていないものも含めて整理すると以下のようになる。まず、鯉江川川掘人足負担をめぐる争論が一六八四・一七二七年の二度あり、今福村樋普請人用負担をめぐる争論が一六八七・九七年の二度ある。これらの争論ではいずれも守口の主張が通り、守口は水利負担を回避している。特に、今福村樋については天保期成立の「地方宿方諸事録」に次のような記載がある。

〔史料9〕^(注58)

摂州今福村二有之

悪水門樋

一松伏樋長式拾間
内法 五尺壹寸六分
板厚 七寸

前々々御国役入用を以御普請被仰付候、但此樋之寸法五ヶ庄分惣悪水抜五ヶ庄大庭大久保庄合村数三十六ヶ村、尤前々々守口ハ組合ニ御座候得共人足并掛り銀ハ出し不申候

このように少なくとも今福村樋についてはこの時期の争論の裁定が近世を通じて機能しつづけたことがわかる。また、野田村堤態切場所普請入用については一七一六年と三五年に争論がある。後者は結果が不明であるものの、前者は前述の通り人足を出していない。また、近世後期になると水利争論の場所が前・中期とは全く異なり、またその内容も、守口の負担免除の是非ではなく主として用悪水の管理責任の問題に変化する。したがって、中期以降は守口が少なくとも今福村樋の負担を免除されることは確定し、水利争論の争点にはなくなっているのではないか。守口の水利負担免除特権が定着するのではないかと考えられる。そのためか一七八八（天明八）年の松月樋普請についての訴状では、五ヶ所のなかの九カ村から「守口町」と呼ばれている。

〔史料10〕
（注59）

乍恐御訴訟

羽倉権九郎御代官所

河州茨田郡

横堤村

証文通ニ違変之出入

諸口村

浜村

南寺方村

北寺方村

石原清左衛門御代官所
同州同郡

世木村

大枝村

松平和泉守殿領分
同州同郡

馬場村

焼野村

右九ヶ村惣代
大枝村庄屋

藤兵衛

南寺方村

儀右衛門

羽倉権九郎様御代官所
同州同郡守口町

相手

庄屋

年寄

一 私共村々上郷大庭大久保之庄・門真之庄惣鉢之村数都合式拾七ヶ村之悪水五ヶ之庄私共村方御田地中江平掛
り二流水仕、摂州東成郡今福村領二有之候門樋戸前明キ候得者、上郷之御田地御高大小惣応二分限之穴樋之悪
水流仕候、則大庭大久保庄拾六ヶ村之悪水焼野村領二而一ヶ所大枝村領二而一ヶ所右式ヶ所之穴樋之流水仕

候、尤大枝村領江落来候惡水守口町領内を流水致来候故、同領之御田地上ミ手ニ大庭大久保之庄惡水請之土手
字松月与申所ニ穴樋在之、夫々守口町領内江落込、大枝村領之穴樋江向、二重越ニ惡水仕候ニ付、右松月樋者
守口町普請所ニ御座候所、先年及大破候得共、普請等閑ニ致置候折節、大雨ニ而大庭大久保拾六ヶ村惡水与守
口町惡水一鉢ニ相成、大枝村領之穴樋江御田地御高米分限ニ不相応之惡水夥敷押掛、惣鉢之請堤保子不申、越
水甚々難儀致申候ニ付、六ヶ年已前卯年惡水落及出入候處、御地頭下ニ相成、対談之上右松月樋聊ニ而も損候
節ハ何時ニ不限急速守口町々普請可仕趣、慥成一札を取下濟仕候、然ル所近頃々松月樋大破ニ在之候ニ付、普
請致候様当春々守口町江度々催促仕候處、相心得候趣ニ返答申越候得共、何分ニも捨置証文通りニ違変仕、今
ニ普請不仕候、殊更此節稻作出穂実乗仕、大切之時節ニ而少シ茂猶豫油断難成候儀ニ御座候故、不絶普請催促
仕候得共捨置候ニ付、不得止事乍恐御訴訟奉申上候、則先年取置候証文奉入御高覧候間、何卒御憐愍を以守口
町庄屋年寄急速被為御召成、証文通り違変不仕、一日も早普請仕候様被為仰付被下候ハ、御慈悲難有奉存候已
上

天明八年申八月十三日

ここで問題になっている松月樋とは、守口町と両橋波村の間を流れる大庭大久保庄一六ヶ村惡水井路に設けられた樋
である。この松月樋は守口町の管理するところとなっているのであるが、その管理が十分でなかったため惡水が大枝
村へ流れこみ、さらに請堤を越水して五ヶ所南方の村々に流れこんだものと思われる。そこで、五ヶ所のうち関係九
ヶ村が守口に松月樋の普請を行なうよう求めたものである。なお右の史料では松月樋の保全の負担を守口町が担う取
り決めの証文が存在することがわかるが、このことはこの地域内での水利負担をめぐる守口の特権的地位を否定する
ものではない。おそらく今福村樋や鯉江川普請のようなより広域かつ大規模な負担は一七世紀末以来守口は免除され

続けていると考えられ、近世後期の段階では、より小規模な部分での管理責任や負担が争論の問題になってきていると思われる。呼称に注目すれば、既にこの時点では水利争論で対立している村々も「守口町」という表現を用いているのである。守口の「町」呼称の地域社会への定着を窺うことができる。

(2) 水利に関する議定に見られる呼称

この項では議定などの史料にみられる呼称を検討する。尤も、残存史料の関係から元禄末年以降の史料しか検討できないため、公的な呼称は「守口町」の段階のものとなる。まず最初に取り上げるのは、一七〇三（元禄一六）年に五ヶ所内の小高瀬組と橋波組の間で水利の争論があり、用水の河幅が取極られている史料である。

〔史料11〕^{〔注60〕}

差上申一札之事

一小高瀬組・橋波組淀川表古川跡用水井路之儀及争論、小高瀬組・橋波組より御訴詔申上候二付、御見分被仰付、委細御吟味之上此度定杭御打被成候事

一右井路淀川表水入口より小高瀬組樋之分り口迄長百八拾弍間之所ハ、川幅敷三間上口六間二御極、定杭所々二御打、双方立合見届少も相違無御座候、尤互ニ申分無御座候事

一橋波組用水井路之儀ハ、ワケれ口より樋前迄之井路有之ハ、只今迄之通ニ而少し茂申分無御座候事

一小高瀬組井路分り口より川下へ古川幅年々狹罷成候二付、是又小高瀬組・橋波組・守口町より御訴詔申上、此度川は、御改被成、上五拾七間之分ハ上下河幅平均九間、夫より川下へ二百四拾三間之分ハ川は、拾弍間二御極、定杭御打被成、則拙者共立合見届少も相違無御座候、此以後双方共ニ堅相守、後々年ニ至迄毛頭混乱仕間敷候、

右場所之訳相絵図ニ仕、御定之通委細相記表書仕差上可申候、為後日連判一札如此御座候以上

河州茨田郡世木村庄屋

治兵衛 ㊦

元禄十六未年五月晦日

馬場村庄屋

九郎兵衛 ㊦

大枝村・西橋波村・東橋波村・北寺方村
焼野村・浜村・諸口村・横堤村
庄屋二名連印略

摂州西成郡北大道村庄屋

左次兵衛 ㊦

橋守村庄屋

(年寄二名連印略)
弥兵衛 ㊦

河州茨田郡守口町庄屋

(年寄二名連印略)
善兵衛 ㊦

同 年寄

与次右衛門

南寺方村庄屋

宇右衛門 ㊦

万年長十郎様

〔史料12〕
(注61)

相極申一札之事

一守口前小高瀬組・橋波組立会用水井路、此度從万年長十郎様井路幅御極、定杭御打被下候二付、小高瀬組・橋波組自分之用水井路幅之儀各挨拶を以相極候事

一小高瀬組自分之用水井路之儀、古杭有之所ハ唯今迄之通二候、杭木無之所者右立会井路わかれ口々水之流巾式

近世の地域社会と在方町(渡辺)

間二相極、此度杭木打置申候事

一橋波組自分之用水井路之儀、古杭有之所ハ只今迄之通ニ候、杭木無之所ハ右立会、井路わかれ口々水之流幅壹間ニ相極、此度杭木打置申候事

右之通各挨拶ニ而互ニ得心之上、小高瀬組・橋波組自分之用水井路幅相極申上者、後々相互ニ申分無之候、然上ハ兩組自分之井路筋之義者不及申、立会井路筋へ少も我儘成義仕間敷候、為後日連判之一札如件

小高瀬組大枝村庄屋

九兵衛 印

同世木村庄屋

次兵衛 印

元禄十六年未七月廿七日

馬場村・北寺方村・南方寺村・焼野村
浜村・諸口村・横堤村

庄屋一〇名連印略

橋波組西橋波村庄屋

彦右衛門 印

東橋波村庄屋

小兵衛 印

同村庄屋

孫兵衛 印

守口町

庄屋
年寄中

ここで問題になっているのは、五ヶ所内の用水の分水の問題であつて、前節で見た争論とは全く別個のレベルに属する。史料11のように、代官の裁定の請書に守口は仲介者として奥印しており、その場合「守口町」と自己を表現しているし、本文中でも「守口町」と記されている。なおこの史料に連判している摂津西成郡大道村と橋守村もまた仲介

者という立場なのであらうか。また、代官の裁定を受けた当事者間で結ばれた史料12では、当事者の小高瀬組と橋波組が守口に宛てる形式になっており、しかもその宛先の表現は「守口町」である。

次に、議定ではないが一七四二（寛保二）年一二月の事例を簡単に紹介する。

〔史料13〕^{（注62）}

一 札之事

一 小高瀬組・両橋波組立合用水井路水流三間、割レ口を両橋波村立会用水井路水流壹間ニ相宛在之事

一 守口町領内字城之越国役堤御普請所樋壹ヶ所、其元用水樋古来を外嶋之内用水井路口を樋先迄水流壹間長百六拾間、年々其元を支配被成候、然処外嶋年々不作致候故、此度当町外嶋用水為勝手我等共相頼申候処、得心之上右井路口二樋伏申候、右用水井路堀浚之儀当町を三分方助人足出シ可申候、尤用水無滞様ニいたし可遣事

一 右樋之儀両橋波村用水不勝手ニ成差構申儀在之候ハ、此方へ不及届ニ其方勝手次第御取払被成、用水御引取可被成候、其節一言之子細申間敷事

一 御公儀様又者何方を差構之儀在之候共、当町之引請何方迄茂罷出埒明ケ、其元へ少茂難義掛ケ申間敷候、万一其村御公儀様江被為召出候儀在之候共、当町へ引請諸入用等其元へ一切掛ケ申間敷候、為後日仍而如件

寛保貳年戌十二月

守口町庄屋

八兵衛

東橋波村

庄屋
年寄 中

西橋波村

庄屋
年寄 中

（年寄三名・百姓代二名の連名略）

右之通兩橋波村へ壺通ツ、被遣候、尤相談之上一統之儀ニ候間、兩橋波村へ之証文ニ当村も連判可致筈ニ候得共、其村領分ニ候故乍同意連判難成候、依之当村も其御村代判相頼申候処相違無之候、則其村へ我々共る奥書連判を以差遣し申候、然上者向後堀さらへ助人足三分方其町当村割合、又者諸入用何程相掛り候共右同断ニ候、此上御公儀様江被為召出候儀又如何様之事候共、式ヶ所立会申上ニ而割合可申候、為後日奥書連判仍而如件

寛保貳年戌十二月

下嶋村庄屋

吉兵衛 ㊦

(年寄三名・百姓代二名の連印略)

守口町

庄屋
年寄 中

[史料14]^(注63)

一札之事

一其村外嶋早魃之砌用水樋之ため其村領内ニ有之候此村用水井路口ニ此度和談之上樋伏込被致候ニ付、右樋有之中子ハ此方用水井路掘浚人足之内三分方ハ其方も助人足可被出候、尤右樋取払候後ハ前々之通人足被出間敷候、為後日仍而如件

寛保貳年戌十二月

西橋波村庄屋

弥兵衛 ㊦

同村年寄

三郎兵衛 ㊦

東橋波村庄屋

治助 ㊦

(以下庄屋一・年寄一名略)

守口町

庄屋
年寄 中

ここでは、小高瀬組と両橋波組の共同の用水路から両橋波村への用水路への分水の幅を一間と取り決め、かつ守口町領内の外嶋が近年水不足で不作であることを理由に外嶋を流れている両橋波村の用水井路に新たに樋を設けて外嶋に水を供給するようにした。その代償として両橋波村の用水井路の掘浚い人足の三割を守口が負担することを取り決めたわけである。史料13では、以上のことを両橋波村役人にあてて約束している。ここでの守口の自己表現は「守口町」が一カ所、「当町」が二カ所であり、差出しの肩書きも「守口町」とあり、一貫して「守口町」であることがわかる。さらに、この一札に、経緯は不明ながら大庭庄に属する下嶋村が守口あてに奥書連判しており、その宛先は「守口町」と表記されるほか、本文中にも「其町」との表現が見られ、五ヶ所以外の村からも「守口町」と呼ばれていることがわかる。史料14は、史料13の一札とはほぼ同内容を今度は両橋波村から守口にあてて確認したものであり、宛先は「守口町」との表現になっており、五ヶ所内の村から守口が「守口町」と呼ばれていることが確認できる。なお、この時守口が負担することになった人足は、五ヶ所内の用水管理についてであり、しかも自らの領域内に他村の水を新たに引き込むことに対する負担であって、それ以前の二七・一七三五年などの争論で問題となっている負担とは異なる。つまり、特権の後退ではないことを蛇足ながら付け加えておきたい。

ただし、例外もあって一七四六（延享三）年の五ヶ所内の上小高瀬組・寺方組・下小高瀬組の三つの組合の間での争論があり、踏車での揚水をしていないことを取り決めた一札は、^{（注64）}「守口村庄屋年寄中」宛てに作成されており、この史料一点のみ本稿では位置付けることができない。しかし、一七〇三年の事例もあわせて考えてみると、少なくとも五ヶ所の地域内では、その内部の争論の仲介者の位置を守口が占めていることは確かであり、五ヶ所地域内での守口の

仲裁機能と「町」呼称の確定は関連があると思われる。

以上のように、本節では前節とは異なつて互いに相争う場面ではない事例を紹介してみた。少なくとも一八世紀においては「守口町」という呼称が地域社会に定着しているものと判断して差し支えないと思われる。

四、宿駅―助郷の地域編成との関係

守口が自らを「守口町」と呼びはじめ幕府との関係での「町」呼称確定を背景に水利負担回避の場面で「守口町」と自己表現するようになる過程と並行して、一六七四（延宝二）年から始まる拝借米金の下付、一六九〇（元禄三）年定助郷（幕領八カ村）設置、一六九三（元禄六）年地子免許・問屋給米下付、一六九四年の定助郷（幕領私領七カ村）設置、一七二五（享保一〇）年の助郷村々の確定（一六九四年の七カ村と同じ、以後幕末まで変化なし）という過程が存在する。つまり、今まで述べてきた呼称変化の過程は、時期的に守口が近世の宿駅として確立し、宿駅―助郷というシステムが成立し機能しはじめる過程と重なるのである。そういう過程について以下述べてみたい。

守口は一六二一（元和七）年以前に成立したものと考えられるが、^{（注6）}人足役のみの宿駅という特殊性のゆえか当初地子免許が与えられなかった。また、他の東海道などの宿駅では一七世紀前半にすでに何らかの形で存在する助郷も守口では付けられていなかった。つまり、守口は近世宿駅としての基本的要件を満たしていなかったといえる。こうした状態に対して、守口は、史料5傍線部bに見られるように一六八七（貞享四）年以前から度々助郷の付属を要求してきた。さらに翌一六八八（貞享五）年には史料2で見たように助郷・地子免許・問屋給米下付・物成米所払い許可の四点を要求して訴願を行なっている。これらの結果としていったんは助郷が設置されるがすぐに解除されてしまう。

このことは次に掲げる宝暦一三年の大庭庄に属する南十番村・北十番村・八番村・七番村・六番村・下嶋村の六カ村から代官宛（推定）の紀州藩通行時の守口への加助郷免除願いにより判明する。

〔史料15〕^(注66)

乍恐書付を以御願奉申上候

（前略）

然ル処此度新規ニ紀伊国様御通行之節は加助人足助郷村々同様ニ相勤候而は重役ニ罷成難儀迷惑ニ奉存候、既ニ七拾六年以前元禄元辰年下番四ヶ村森本惣兵衛様御代官所ニ而其節御吟味も無之候而、右四ヶ村江守口宿之助郷被仰付候処、同年ニ今井九右衛門様御代官所ニ罷成、依之今井九右衛門様江右往還通り人足差出候儀并淀川表刈拂等余村と逡役儀相勤候故、重役之段申立御願奉申上候ニ付、右助郷役御免被為成下候、尤此度被仰付候は、紀伊国様通行斗ニ限り守口宿助郷同前ニ加助人足差出候様被仰付候得共、余村と逡格別役儀も相勤候村方共に罷有候処、其上紀伊国様御通行之節守口宿助郷同前ニ加助人足可差出旨、私共六ヶ村斗江新規ニ被仰付候儀何共嘆ケ敷難儀仕候、乍恐被為聞召上右加助人足差出候儀御免被為成下候は普百姓相続可仕と御慈悲難有可奉存候、以上助郷が解除されたのは、助郷に指定された四カ村が傍線部のとおり「往環通り人足差出」と「淀川表刈払」の二つの「役儀」が「重役」になると新任の代官今井九右衛門に訴願したためであった。この四カ村は大庭庄の「下番四ヶ村」であり、守口と周辺農村との間で助郷設置をめぐって一定の緊張関係が存在したことが窺われる。前節に見た守口の負担免除をめぐる水利争論も延宝初年の度重なる大規模な水害による水利負担の増大^(注67)とともに、直接にはこうした事態を契機としているのであろう。すなわち、史料7の波線部の「宿役之儀八年ミ外ニ御用拾も有之」との論理からの推測ではあるが、守口に宿駅としての助成が与えられるにつれて地域の村々にとっては宿役が負担回避の根拠にはな

らないと意識されたのではなからうか。しかし守口にとつてみれば他の宿駅と同等の扱いを受けるようになっただけであつて役負担の秩序は何ら変更の必要がないものであつた。当然のことながら公儀もそれを維持しつづけるのである。

さて、先述の助郷解除を受けて、守口はこの年から三年連続して助郷願いの江戸出訴を行なっている。このことは次の史料傍線部から知られる。

〔史料16〕^(注68)

覚

一私御代官所河州茨田郡守口宿之儀、殊之外困窮仕人足役相勤兼申ニ付、定助郷被仰付被下候様ニ達而百姓共相歎申候間、困窮之詛吟味仕候処、先年者往來之旅人多旅籠等仕、其助成を以人足役相勤候得共、近年ハ淀川表ニ新三拾石船出来、伏見・淀々大坂へ船ニて往還仕候故何之助成も無之、東海道筋余宿と替、守口・枚方・橋本此三宿ハ片道ニ而通り之者無御座、少之かせきを可仕様無御座次第二困窮仕、人足役之もの共減御役難勤候由申候、夫故去々年去年当年御訴詔ニ江戸へ罷下り申候、因茲去年中定助ニ願上候村々障之有無委細承届書付指上申通、今井七郎兵衛御代官所摂州今市村高八百六拾五石九斗、(以下村名のみ記す、いずれも代官領)南嶋村、江野村、薙生村、馬場村、上辻村、般若寺村、土居村、別所村、焼野村、都合高四千九百七拾八石六斗五升三合定助郷ニ被仰付被下候様奉願候、於然者右村々守口宿同前二国役夫役六尺給米御赦免被下候様ニと奉存候、右定助不被仰付候而ハ、守口宿之者共必至と難儀仕候、困窮之上御役滞申候而ハ私不念ニも不罷成と奉存、不看軽度々申上候、御了簡之上奉得御下知候已上

元禄三年八月

森本惣兵衛

御勘定所

このように今まで述べてきた一連の経緯の結果として一六九〇（元禄三）年にこの史料のごとく助郷設置を代官森本惣兵衛は幕府勘定所に上申し、同年八月一六日には勘定所より代官森本へ守口の助郷設置が命ぜられていた。^{（注69）}また、引き続いて一六九二（元禄五）年の地子免許その他があるのである。なお、この段階の助郷村々は全て代官領であって私領は含まれておらず、一六九四（元禄七）年の助郷帳下付によって私領も含みこんだ守口近接の助郷が編成されるのは、交通史の通説の通りである。^{（注70）}

助郷の設置は、防水・水利組合を基盤とした地域社会のなかに、宿駅と助郷村々という「地域」が設定されたといえよう（以下水利の地域と区別するため「地域」と呼ぶ）。図2に見られるとおり、守口宿助郷七カ村は、五ヶ所一四カ村のなかの五カ村と門真庄五カ村のうちの二カ村から成っている。そればかりでなく、五ヶ所内部の橋波組という中世の「庄」の系譜を引くと思われるより小さな単位の水利・防水結合をも分断してしまっている。つまり助郷の「地域」は水利組合の地域秩序を分断するものであった。守口はそうした「地域」編成の形成過程で宿役ゆえの水利負担回避の特権を主張し、その象徴として「守口町」という呼称を振りかざす。一方、村々はあくまで「守口村」という呼称を用いることにこだわることによって、水利組合のなかの一つの村として守口を地域の秩序のなかに取り込もうとしていると評価できる。

しかし、一七〇三・一七〇四（元禄一六・宝永元）年の二つのほぼ同内容の助郷割り替え願いを比較するとき、定助郷に編成された村々は、防水・水利組合の村としての自己表現を助郷の村としての自己表現に取り替えていく。あるいは自己表現の変更を余儀なくさせられていくというべきか。具体的には以下のとおりである。

〔史料17〕^{（注71）}

乍恐御訴訟言上

小堀仁右衛門殿御代官所河州茨田郡拾七ヶ所之内、門真庄三番村・四番村、

小高瀬庄大枝村・世木村・馬場村百姓共二而御座候

(前略)

一私共村々者大分之水場殊ニ守口宿とハ余程道法隔リ、其上土居村より三拾五町余外江下リ申候田地ニ而御座候
ニ付、以之外耕地之かまひも罷成候、依夫急御用之節ハ迷惑至極仕候、其上洪水之節ハ守口宿江通路も難成、
彼是以難儀迷惑仕候ニ付、乍恐御割替奉願上候御事、右之通守口宿助郷御割替奉願上候、則委細絵図書付指上
ケ申候処相違無御座候、乍恐守口宿江成とも御尋被為成被下候ハ、分明ニ相知可申と奉存候、私共村々者守
口宿江之道筋別而惡敷御座候ニ付、大雨仕候朝又者洪水之節ハ急ニかけはしりも難成、急御用之節は難儀迷惑
仕候、往還筋々儀者鍛道法少々遠ク御座候とても、道筋能御座候ニ付、守口宿江昼夜急ニかけはしりも自由仕
(ママ、縦力)
候、前々御割替之儀何方より御願被申上候哉、私共少茂不奉存千万歎ケ敷奉存候、御慈悲を以被為聞召上、乍
恐道法遠近又者道筋御吟味之上、定助郷御割替被為成被下候ハ、水場之百姓御助と難有奉存候以上

元禄十六年未五月

河州茨田郡三番村庄屋

又兵衛 ㊦

同村年寄 五郎兵衛 ㊦

右同断 市左衛門 ㊦

同村百姓代 利右衛門 ㊦

御奉行様

右の内容は概ね出願している五カ村が街道筋ではないので緊急の人足提供が困難であるから街道筋の村々に助郷を割り替えてほしいというものである。ここで注目されるのは、冒頭に「小堀仁右衛門殿御代官所河洲茨田郡拾七ヶ所之内、門真庄三番村・四番村、小高瀬庄大枝村・世木村・馬場村百姓共ニ御座候」とあるように、訴え出ている五カ村は、拾七ヶ所という上位の水利組合のなかの門真庄もしくは小高瀬庄（五ヶ所内部の小高瀬組のこと）所属の村として出願していることがわかる。

ところが、一七〇四年の守口宿定詰人足免除願いと前年とはほぼ同内容の助郷割り替え願いになると、その願書の冒頭はいずれも「河洲守口宿定助郷七ヶ村之内、小堀仁右衛門殿御代官所三番村・四番村・大枝村・世木村・馬場村五ヶ村之百姓共ニ而御座候」とあって、一年前と全く同一の五カ村が今度は守口の助郷村の中の五カ村という所属で表現されている。^(注72)

これは、いかなる局面においても、地域の自己表現を用いていた状態から、交通の局面に関しては「地域」の自己表現を用いる事態に変化したことを意味する。こうした地域社会の変化の中で、三章で見たように守口は水利負担回避の特権を持つ「守口町」として自己を確立していくと考えられる。

五、守口内部の階層による呼称の違い——一六八九（元禄二）年村方騒動——

ここでは、守口が「守口町」としての特別な位置を地域社会のなかで獲得していく過程で、守口内部でどのような近世の地域社会と在方町（渡辺）

変化が起きているのか、また内部の階層と地域社会との関連について検討してみたい。素材として、一六八九（元禄二）年の村方騒動を取り上げる。

〔史料18〕^{（注73）}

乍恐御訴訟申上候

私共儀ハ河内守口村小百姓共ニ而御座候

一守口村庄屋八兵衛数年之捌我儘ニ被致迷惑ニ奉存候、然共議之小百姓ニ御座候ヘハ、御公儀様江申上候儀恐多

奉存罷有候ヘ共、余リ大分之私欲を被致、其日暮之小百姓共守口之住宅も難成先以御公用も勤兼候様ニ付、乍

恐御訴訟申上候事

一守口村困窮仕候ニ付、去ル拾六年前寅年為御赦金子百両御拝借仕候、則三年過^{（マ、数カ）}去ケ年ニ金子拾両宛拾年之間

ニなしくずしニ御上納仕候様ニ被為仰付難有奉存、公事人七拾七人御座候ニ付金子壹両宛請取申候、此金子ハ

御江戸ニ而請取申候ニ付、御江戸ヘ庄屋被參候路銀ハ七拾七人々人前ニ銀子六匁宛出シ渡シ申候而、金子壹

両宛請取申候ヘハ、此殘金子式拾三両御座候御事

一守口宿者人足役之宿ニ而御座候、右申上候通困窮之百姓ニ而御座候得ハ、又候拾四年前辰年御米三拾五石金

子五拾両二口之代銀四貫九百四拾九匁余、七拾七人之公事人共拾ケ年之間御拝借仕候処ニ、庄屋衆被申候ハ此

度御拝借仕候金子・米ハ外ヘ借シ、此利銀ニ而右寅年百両之金子拾ケ年拾両宛御上納可仕と被申候ニ付、可然

奉存此御拝借之米金ハ被下候、請取不申候処ニ、右寅年之余リ金式拾三両御座候上ニ、巳午未酉三年ニ銀壹貫

八百四拾八匁集取被申候、此金銀ハ八兵衛兄源兵衛と申候、此源兵衛は庄屋仕候処ニ永々煩居被申候ニ付、内

外共八兵衛さはき被申候故、兄弟談合ニ而取込被申候御事

三年已前卯年二八兵衛被申候ハ、右寅・辰之御拝借金ニ不足銀有之と被申候而、其節銀貳貫八拾四匁八兵衛集取被申候、是迄之金銀五貫貳百目余御座候、此外二銀子壹貫貳百目余取込御座候事

一拾年以前申年金子五拾兩御拝借仕候、此金子ハ道中御巡見様御持參被為成候ニ付、庄屋八兵衛大津迄出向御目見へ仕歸り被申候、其節之人用銀七拾七人ト、老人前二銀拾四匁六分宛、右大津へ參候入用とて御拝借金二而引取、殘金渡シ被申候、大津迄之義ニ御座候へハ銀子五拾目か百目かと被申候へハ尤ニ存候得共、守口ト大津迄參候とて壹貫目余集取被申候御事

一每年八月二大坂御番代之時分、御番衆様人足御雇被成候ニ式人相二錢九拾貳文宛被下候、壹ケ年二錢拾五貫貳拾貳文程ハ御座候、年二より少外之人足雇申事も御座候、此錢二而雇賃も渡、殘錢先年ハ七拾七人江割被申候、近年ハ壹錢マもし違不被申候而、八兵衛皆取込被申候、其上七拾七人之者共雇なしニ大形御役義相勤申候、其日暮之者共二候へハ迷惑ニ奉存候御事

一守口村ハ御公儀様繼飛脚仕候ニ付、御扶持米として毎年御米拾四石五斗七拾七人へ被下候、壹人前二米壹斗七升宛相渡、殘米四斗余八兵衛數年取込被申候御事

一五節句二錢拾八貫文余小百姓手前ト三年以來集取被申候、此錢ハ何ニ入候と尋候得ハ、御公用ニ入申候と何之わけも不被申每年集取被申候間、乍憚御僉議被為成可被下候御事

一每年十月二御藏付錢と申錢壹貫五百文宛集取被申候、此儀も乍恐右同断ニ奉願候御事

一八兵衛儀百姓之難儀もかへり見す、私欲斗被致候事數々御座候、就夫去年淀川表御用かい堤之土芝を大勢人足をかけ取やふり、大坂へ舟二而大分下シ被申候、此堤之儀ハ守口一村之ため斗二而も無御座候、水下之分ハ何角と申事ニ御座候、先ハ人足大勢遣被申候儀迷惑仕候、此土芝之儀ハ八兵衛壳被申候様ニ奉存候、小百姓へハ

壹錢も取不申候御事

△¹¹

一村之惣作田地式反程御座候、此田地先年ハ村之者共廻り作ニ仕候処ニ、八兵衛兄源兵衛代々今ニ至リ、太郎兵衛と申者老人ニ壹石宛ニ而作せ候ハ、三石宛ニ而ハ誰も作り申所ニ而御座候、此太郎兵衛儀ハ八兵衛近キ親類ニ而、其上八兵衛自分之田地五拾石程之田地さはかせ申候、其ほうひニ作せ申候、其上此壹石之宛米も村ヘハ壹升も出シ不申、八兵衛數年取込被申候御事

△¹²

一村之内ニ銀役に而惣公事役人頼申者四五人御座候、老人前ニ銀四匁宛毎年取被申候、此銀之払方も忘れ不申候、此銀も八兵衛取込之様ニ奉存候御事

△¹³

一八兵衛儀御公用ハ勿論私用ニ茂御公儀様並公事役人足を取籠ニ乗、又ハ方々江私用之夫等ニも役人足を大分遣被申候、其上大坂江度々下り被申候ニ一日歸リニ可致候事も永々逗留仕、一日ニ式匁ツ、之□□を給、入用大分出シ迷惑仕候御事

△¹⁴

一年々村之入用大分打掛取被申候、尤去年ハ籠舎人も御座候ヘハ、銀高四貫三百目程割出シ申候、此入用ハ高かけ又ハ家役も可有御座候処ニ、大形家役平等ニ集取候ヘハ、少々之小百姓ハ御年貢入用大分ニ出シ迷惑ニ奉存候、守口ハ高四百石余之所大分入用銀集取、其上御公儀様被下候飛脚扶持米、御拜借金、其外取込銀御座候ニ付、村中殊外草臥果申候

△¹⁵

此外八兵衛横道之品々悉ク申上候ヘハ數々御座候、則八兵衛庄屋・年寄被致候以來諸事私欲御座候ニ付迷惑仕候、御慈悲之上被為聞召上數年取込被申候錢・銀・御扶持米其外訴狀ニ書記申、取込一々勘定仕展シ被申候様ニ乍憚八兵衛被為召出被為仰付被下候ハ、難有可奉存候以上

元禄貳^巳年三月廿四日

森本惣兵衛様

河州守口村

小豆姓共

伊右衛門

〔外四四名の名〕

△1▽は、この訴状の総論的な序の部分であり、庄屋八兵衛の「捌」に「私欲」の部分が多くのことを訴えている。以下、△2▽△14▽において個別的な争点が提起される。

△2▽△5▽は拝借金の運用と分配にかかわる問題である。まず△2▽では一六七四（延宝二）年に百両を拝借し、その返済は十年賦の予定であったこと、拝借金江戸請取の旅費は別途公事人（＝人足役負担者）より徴収しており、拝借金一〇〇両は一両ずつ七十七人に分配したので、残額は二三両あること、を述べている。次に△3▽では、一六七六（延宝四）年に米三五石と金子五〇両を拝借したが、一六七四年拝借金の返済のための利殖の元金にしたため、公事人には配分しなかった、したがって、一六七四年拝借金の配分残金二三両と一六七七―七九（延宝五―七）年の三年間に集積した銀一貫九四九匁余を八兵衛とその兄源兵衛が取り込んでいる、と主張している。△4▽は、一六八七（貞享四）年に拝借金に不足銀があるとして銀二貫八四匁を徴収したので合計五貫二〇〇目余が八兵衛の手元を集積されている筈であり、そのほかに銀一貫二〇〇目余を取り込んでいる、という。△5▽は、一六八〇（延宝八）年に拝借した五〇両は、その請取に大津まで出向いた旅費を差し引いて配分されたが、別途に大津迄の旅費として一貫一〇〇目余を徴収された、と述べる。

△6▽では、大坂番衆人足の雇銭の残額を先年は七十七人に配分していたのに近年は八兵衛が取り込んでいて迷惑である、といい、ついで△7▽は、公儀継飛脚の扶持米を公事人に配分した後の残量四斗を八兵衛が取り込んでいるというものである。

ここまでは、守口の宿としての機能にかかわる問題とみてよいであろう。△2√△5√の拝借金は、受取人が七人の「公事人」＝人足役負担者であることから、宿駅であるがゆえの拝借金下付と考えてよい。また、この時期の五街道宿駅に対する拝借金下付は幕府の交通政策の一環でもあった。^(注74)△6√は宿駅とは関係ない負担かもしれないが、残額の配分先が人足役負担者に限られている。△7√は継飛脚給米の下付であるから言うまでもなく宿駅のみに生ずる騒動の論点である。したがって、訴訟主体を表現する言葉も他の条項とは異なってくる。冒頭および△1√では、自らを「小百姓」と表現しているのに対し、△2√△7√では「公事人」もしくは「七拾七人」という人足役負担者に限定した書き方をしていることは注目される。つまり、この訴状の前半の論点は、人足役負担者の利害に基づいた論点なのである。ちなみに、△12√も、宿駅の人足役を含む「惣公事役」を代銀納化している者が「村之内」に五人おり、その代銀納分の支出が不明確であり八兵衛が取り込んでいるのではないかという疑惑を表明したものであるから、この分類に含めて考えてよい。

△8√△9√は、目的不明の五節句銭・御蔵付銭徴収を詮議してほしいというもの。

△10√は淀川堤の土芝を八兵衛が勝手に売却した事に対し、人足を大勢使用したことを売却代金を「小百姓」へ配分しないことを一義的には問題としたものである。それとともに、守口村内の淀川堤は守口一村ためばかりでなく、水下の村々―この地域の用悪水の流路から見ても五ヶ所村々をさしている―のためにも存在しているのだから、五ヶ所村々より抗議される可能性があるといっている。これは本稿の課題にとって重要であるので記憶に留めておきたい。

△11√は、村惣作田地の宛米を庄屋八兵衛が取り込んでいると追求している条項であるが、この中の傍線部に見られるように、八兵衛は五〇石の田地の経営を親類太郎兵衛にまかせているというのであるから、少なくとも高にして五〇石の経営規模を持っていたことがわかる。

△12▽については既に述べた。△13▽は庄屋八兵衛が私用に公事役人足を使うこと及び大坂出張費用への批判である。

△14▽は村入用の問題である。村入用を「家役」で徴収しているが、持高の僅少な小百姓は年貢よりも高額^(注75)の負担額になってしまふと述べている。これはこの時期の畿内の村方騒動に共通の論点であり、この訴状の文言では明確ではないが、村入用の高割り要求と考えて差し支えないであろう。

このように、△8▽△14▽は、△12▽を除いては、村として生起している問題を取り上げているものであり、そのためか、訴訟主体あるいは守口という社会集団の構成員の表現も、前半部分の「公事人」とは異なつて、「小百姓」「百姓」あるいは「村之者共」となっている。

△15▽は、本訴状の総括部分である。庄屋八兵衛の横道な私欲の行為を非難し、八兵衛取込みの銭・銀・扶持米を勘定して小百姓への還付を要求している。

以上見てきた様に、この小百姓の訴状を細かく分析していくと、宿駅の騒動としての前半部分と村方の騒動としての後半部分に、概ね分割して把握することができる。したがつてこの村方騒動は一つには宿駅の人足役負担者の利害に基づくものであり、もう一つの側面として村入用明確化と高割り要求という村としての側面も併せ持つことができる。

次にこの村方騒動で対立している階層を考えたい。前提として、守口の当時の階層構成について検討する。以下に紹介する史料は先の訴状に付されたものである。^(注76)

〔史料19〕

乍恐追而口上、守口村公事役七拾七人之次第

近世の地域社会と在方町（渡辺）

一高五升五斗迄之百姓拾人程御座候、此内ニ無高ニ而公事役相勤申候百姓も御座候

一高壹斗五斗迄之百姓三拾人程御座候

一高壹石五斗迄百姓拾人程御座候

此三口之百姓五拾人程御座候、此五拾人程之者高五升五斗迄之百姓ニ而御座候へハ、大分入用銀か、り迷惑仕候

一高三石五拾五石迄之百姓拾人程御座候

一高三石五拾石迄之百姓四五人程御座候

是ハ出作之百姓ニ而、但公事屋敷之もの

一七拾七人役家之内庄屋・年寄借屋四五軒程御座候

一高米大分持候者ハ庄屋・年寄、外ニ問屋・あるき

一是九人ハ御公儀様御役義不仕候

右之通(ママ、様方)ニ讒之小百姓之儀ニ御座候処、方々公私之諸役相勤飢命ニおよひ迷惑仕候、取わけ八兵衛庄屋・年寄之さ

わき被致候以来ハ、弥草臥果御役儀等茂勤兼申候様ニ罷成、迷惑至極ニ奉存候、乍恐御慈悲ニ被為聞召上被下候

ハ、難有可奉存候以上

元禄貳年巳年

三月廿四日

河内守口村

小百姓共

四拾五人

森本惣兵衛様

〔史料20〕

乍憚去年之入用銀出シ申覚

一拾壹匁七分

家掛り 但 公事役家八拾軒余
半役公事家共

一拾壹匁七分

無足人七拾軒程^②出シ

一九匁七分

六・七匁

(ママ)
之者少御座候

一六匁

籠入之入用銀 但、公事人之分出シ

一高四百石余二

石二五匁四分、高掛り

一四升

庄屋給出シ

一貳升五合

あ里き給出シ

一百七拾文

五節句二出シ

一拾八文

御蔵付錢二出シ

後者の史料20は、『守口市史』史料編では、前者の史料19の四つ目の一つ書きの直前に挿入されている。しかし、内容から判断するとこのように二つの史料として読んだ方がわかりやすい。史料20の傍線部①から人足役負担者には一軒役と半軒役の二種があり全体で八〇人余りであったこと、さらに傍線部②から人足役を負担しない高持百姓が七〇人ほどいたことが推測される。人足役負担者のなかでは、史料20から、所持高五升から一斗の者が一〇名、一斗から五斗の者が三〇名、一石から二石の者が一〇名、三石から一五石の者が一〇名、ということが判明する。役免除の九

人と「出作」の四・五人を合算しても七七人に届かないのは、ここに挙げられている数字が概数であることと、五升から一石、二から三石の所持高の者が実は若干数存在することによるものと解釈しておく。ちなみに、史料20傍線部の「無高二而公事役相勤申候百姓」とは人足役負担の屋敷地のみを所持している者と解釈している。^(注7)また五つ目の一つ書きにある「出作之百姓二而、但公事屋敷之もの」とは守口以外に居住する者で守口に人足役負担の屋敷地と田畑を所持している者と考えている。

おそらく騒動の主体である「小百姓」四五名は、二石以下の人足役負担者約五〇名と人足役を負擔しない高持百姓七〇名の中に含まれると考えられる。これに対して、庄屋八兵衛は、史料18の△11▽の解釈で述べたように、少なくとも五〇石以上という規模の大きな経営を行なっていたことがわかる。

次に、庄屋八兵衛の返答書を掲げる。

〔史料21〕^(注8)

乍恐返答書を以申上候

△1▽ 一守口宿小百姓中目安差上ケ、御裏判頂戴仕候御事

△2▽ 一拾六年以前寅年為御救守口宿江御錢四百貫文御江戸二而拝借仕候内、金子貳拾三兩私取込申候由申上候、此儀ハ不存寄儀ニ奉存候、其年之庄屋者与次右衛門二而御座候、則割符相渡シ候帳面御座候御事

△3▽ 一拾四年以前辰年御米三拾五石・御金五拾兩拝借仕候金米之内二茂、私取込大分御座候様ニ申上候、其時分ハ未私義ハ年寄ニも罷出不申候、金米借シ付指引之儀ハ委細勘定帳御座候而、残ル年寄共奉存候御事

△4▽ 一右兩度之拝借金米錢指引之内江、巳午未三年銀壹貫八百四拾八匁余集取候由申上候、右三年之内午之年老年ハ銀五百九拾九匁八分五厘庄屋九郎兵衛集、御錢代ニ返上納仕候、巳・未兩年ハ集不申候、委細勘定帳目録ニ御

座候、尤右兩年ハ九郎兵衛・与次右衛門庄屋仕候ニ付、其時分之儀ハ私存知不申候御事

一三年以前卯年ニ右寅・辰之拝借不足ニ、銀貳貫八拾目余私取集申由申上候、此儀ハ寅・辰拝借指引不足銀二而申渡シ候得共、集り銀ハ老貫百六拾目余なれてハ請取不申候、委細之義ハ勘定目録集帳所持仕候御事

一拾年以前申年金子五拾兩拝借仕候節、御巡見様御向ニ私大津迄參候夫銀二、老貫百目余集取申候由申上候、此儀ハ御巡見様御用様々被仰付候而、役人共不殘數日方々江參候入用、其上御巡見様守口宿御昼休被遊候入用ニ御座候、則其年ハ与次右衛門庄屋ニ而、委細弘帳面ニ御座候御事

一毎年八月ニ大坂御番代之時分人足御雇被成候賃錢、私取込申由申上候、此義ハ問屋支配之儀ニ御座候故、清兵衛能存知申候御事

一守口宿江被下候御繼飛脚御扶持方米拾四石五斗貳升八合之内、四斗余私數年取込申由申上候、此義毎年割方帳面御座候御事

一五節句ニ錢拾八貫文余小百姓手前々三年以來取りあつめ候由申上候、守口宿ハ地方斗之所ニ而ハ無御座候、町方御用相勤申候ニ付、正月・七月・八月・九月ニ都合錢拾貫六百九拾文宛先年々當番之庄屋方江集め取来申候御事

一毎年十月ニ御藏付錢と申、老貫五百文取集申候由申上候、是又前々々錢老貫八百九拾文宛集申候而、御納所初納之時分庄屋・年寄・頭百姓罷出、當番之庄屋方ニ而食酒給申候入用ニ仕来申候御事

一私我儘ニ淀川表御屋うかい之堤土芝、大勢人足をうけ取屋ふり大坂へ舟ニ而大分下シ売申由申上候、以之外成偽り申上候、右取屋ふり候場所御座候は、乍憚御檢使を被下、場所御改被為成可被下候御事

一村作田地を我儘ニ私親類之者ニ宛米下直ニ作せ、其年貢を私取込、村へハ老升も出シ不申候由申上候、此義ハ

前々々石式斗宛ニ而太郎兵衛と申者代々作り来り申候、尤石式斗之年貢毎年村中勘定帳面ニ御座候而、委細年寄中存知申候御事

△¹³ 一村之内先年々役銀ニ四匁宛出シ申者御座候、此銀も私取込申由申上候、右之銀ハ毎年入用帳ニ御座候、大坂宿

私之儀者隣村並ニ私申候御事

△¹⁴ 一私御公用之外私用ニ茂御役人足を取、^(ママ)がこへ乗、私用之吏等ニも役人足大分吏、^(ママ、使カ)其上大坂ニ永逗留仕、一日ニ

銀式匁宛之はたこを給、入用大分ニ出シ、迷惑仕候由申上候、御公用之外御役人足渣かい候事、毛頭無御座候、急御用之時分ハ私ニ不限庄屋・年寄・問屋迄籠ニ而上下仕候事度々之事ニ而御座候御事

△¹⁵ 一去年村之入用銀高四貫三百目程之入用、高かけ・家役も可有御座候處、大形家役平等ニ集取候故、少之百姓ハ御年貢入用大分出シ、迷惑仕候由申上候、此義ハ、前々之かくを以、宿方・町方・地方見合割符仕候、委細

入用帳ニ御座候御事

△¹⁶ 一私私欲仕守口宿困窮仕候様ニ申上候得共、守口宿困窮之儀前々ハ渡世之勝手ニ罷成候事も御座候得共、近年ハ諸事御法度御明鏡ニ被為仰付候故、下々迄諸事慎申儀ニ御座候、其上旅人之泊り無御座年々宿中困窮仕候處ニ、返而私へ難題申かけ候儀、何共難心得奉存候、訴状判形之内四五人も前々不念成儀仕候者御座候而、急度吟味仕候義共御座候、左様之儀などを意趣ニふくみ申候哉、此外ニも式三人ハ勝手よろしく暮シ申二付、日比我儘をかまへ加様之儀をたくみ、此度別而とう取仕、大勢之小百姓をさわかし申候御事

△¹⁷ 右之通少茂偽り不申上候、ケ様之儀

御前様江罷出候事、何共迷惑ニ奉存、最前下々ニ而相済申候様ニ仕度、右品々之内拝借一件并集取候銀錢は委細ニ勘定帳面を見せ可申候、其外諸事村さはき并大坂宿私等之儀者私宅人之了簡ニ可仕様無之候間、以来ハ村中相

談次第如何様共相究被申候様二と、挨拶を以色々小百姓中江申達候得共、承引不仕候二付、無是非返答書を以申上候、ケ様之徒成儀申上候百姓共ニ御座候得共、御役義等も滞り可申候哉と嘆ケ敷奉存候、御慈悲之上守口宿おさまり、御用も無恙相勤り申様ニ被為仰付被下候ハ、難有可奉存候

元禄貳年

巳四月十八日

森本惣兵衛様

守口宿

庄屋

八兵衛

この史料も逐条的に検討したい。

△2▽／△6▽では、訴状の△2▽／△5▽の拝借金の問題について返答している。△2▽は、一六七四年の拝借金百兩のことについて、庄屋は与次右衛門だったので知らないが、配分したことがわかる帳面があるという。△3▽では、一六七六年拝借米金の運用については、庄屋でも年寄でもなかったもので知らないが、勘定帳が存在し年寄が知っている」と述べる。△4▽は、一六七四年と一六七六年の二度の拝借米金の会計で、一六七七―一六七九年の間は、一六七七年に銀五九九匁八分五厘集め、七八・七九年は集めなかった、詳しくは勘定目録に記載してある、尤もこのことについても自分は庄屋でなかったので直接には知らないという。△5▽には、一六八七年に拝借金返済のための徴収金額は、銀二貫八四匁ではなく銀一貫一六〇目余である、詳細は勘定目録集帳に記載されておりそれを自分は所持しているとある。△6▽では、一六八〇年に五〇両拝借したときの徴収金は、巡見使に命ぜられて宿役人が方々へ出向いた費用と、巡見使が守口で昼休したときの費用であり、払帳面に記載されているという。ついで△7▽は、大坂番代人足の雇賃金は問屋支配であるので自分は関知していない、△8▽は継飛脚給米については「割方帳面」が毎年ある、といっている。

前半の宿駅の機能にかかわる争点については、庄屋八兵衛は「割符相渡候帳面」「勘定帳」「勘定帳目録集帳」「払帳面」「割方帳面」といった諸帳簿を根拠として逐一反論していることがやや目を引く。引き続き後半部分を検討する。

まず△9▽で、五節句銭を徴収する理由として、「守口宿」が「地方」のみの所ではなく「町方御用」も勤めることを挙げているのは注目される。△10▽は、蔵付銭は以前から錢一貫八九〇文集め、年貢の初納の時、庄屋・年寄・頭百姓が共同飲食をする費用に遣っているという。△11▽は、淀川堤の土芝を人足を大勢使用して取り破り売却したというのは偽りであり、検使を派遣して取り調べてほしい、と述べる。△12▽では、村作田地は太郎兵衛に代々耕作させており、その年貢一石二斗は「村中勘定帳面」に毎年記載されている、という。これは小百姓が問題としている宛米を年貢にすりかえているようにも見える。△13▽は、役の代銀納分は毎年「入用帳」に記載してあるというもの。△14▽は、役人足を公用以外で使用したことはないし、駕籠を使うのも他の村役人同様に急御用のときだけである、という。△15▽では、村入用を家役を基軸として徴収しているのは、以前からの規定であり、宿方・町方・地方を見合わせて割付している、詳しくは「入用帳」に記載してある、という。「宿方・町方・地方見合」という文言は、村入用の支出項目が宿・村・町の三つの部分に分かれるという意味と、村入用の徴収方法が宿・村・町の三つの方法に分かれるという意味の二通りの解釈が可能だが、いずれにせよここでも△9▽と同様に純粋な村ではないことを家役基準の村入用徴収の理由としていることが注目される。△16▽は訴状の内容に答えたものではなく、争論発生把事情を庄屋の側から説明している。これによれば、宿中困窮の状況から庄屋に難題を持ちかける者がおり、またその者は以前に落ち度があつて急度吟味されたことがある者であつて、その意趣で頭取となつて大勢の小百姓を騒がしている、という。

後半部分では、△9▽の五節句銭のところと、△15▽村入用の徴収方法について述べたところ（傍線部）で、いずれも守口が単なる村ではなく、宿駅としての機能をはたさなければならない、あるいは集落・集団が複合的構造をもっていることを強調していることが、本稿の分析にとって重要である。

△17▽は全体の総括部分で、拝借金と村入用などの徴収金については「勘定帳面」を見れば事態は解決するとし、その他の村運営に関することは庄屋一人で決められることでは本来ないので、村中相談で村を運営していこうと小百姓を説得したが、承知しないので返答書を認めるに至った、としている。

以上の検討から、この村方騒動は、主体の階層が零細な高持ちであるということと、要求のなかに村入用負担の分割りに反対するという階層の特質に基づく要求が見られることがわかる。したがって、水本邦彦氏のいう「前期村方騒動」の「第二形態」に相当し、この騒動の結果は不明ながら、この時期、守口も「構成員による、より平等化された〈村〉」への道程を歩んでいると評価できる。^(注79)ただし、守口の場合は、宿駅でもあるので、要求も宿駅の人足役負担者としてのものが大半を占めている。いいかえると「前期村方騒動」「第二形態」の在方町としてのあらわれ方を見て取ることができる。

呼称について検討したい。前提としてこの時期、守口は村としては「守口村」、宿駅としては「守口宿」という呼称であつたことを再確認しておく。これに対応するかのように史料18の小百姓の訴状では「守口村」となっているのに対して、史料21の庄屋八兵衛の返答書は「守口宿」と記す。小百姓の「守口村」の意味は、史料18の訴状の△10▽の淀川堤土芝売却の問題について述べているところで、「此堤之儀ハ、守口一村之ため斗二而も無御座候。水下之分ハ何角と申事ニ御座候」とあるように、庄屋八兵衛の行為を非難するためとはいえ、水下の五ヶ所などの村々の生産条件にも配慮する論理も用意していることに表れている。したがって、この村方騒動は、先に取り上げた一六八七年

の水利争論（史料4）の二年後でもあるから、五ヶ所村々との対立関係を前提として守口の老百姓がこのような論理を持ち出しているものと推測される。つまり、老百姓は、地域のなかの「守口村」の「老百姓」として行動している側面を持ち、そのことが、自らを「守口村老百姓」と表現することになったものと思われる。

それに対して、庄屋八兵衛が「守口宿庄屋」と表現するのは、史料21の返答書（傍線部）の五節句銭徴収の理由として「守口宿ハ地方斗之所ニ而ハ無御座候町方御用相勤申候ニ付」と述べているように、守口の宿駅と村という複合的機能のゆえに多種の経費の多額の支出を必然化するという論理の表れであろう。この論理は先に見た水利組合との争論のなかでの守口の負担回避の論理と近いものがあるように思える。庄屋八兵衛は守口内部の階層間矛盾も、周辺村々との地域間矛盾も全て守口が宿駅であることを論拠として乗り越えようとしているのである。その意味では、村方騒動での庄屋の「守口宿」という呼称と、水利負担争論での守口の「守口町」という呼称はその持つ意味合いが近接しているといえよう。

おわりに

本稿で取り上げた守口は、おそらく在方町としては特殊な事例に属すると思われる。しかし、それがゆえに、逆に近世社会において在方町が「町」という呼称を持つ意味の一面面を明らかにし得たものと思う。それは、国家的な公儀の役―ここでは宿駅の人足役―を負担しており、そのために地域の水利普請のうち「役的編成」^(注80)による編成を受けた部分の負担が免除されるということを象徴する呼称であった。つまり、町呼称は地域社会のなかで当該の在方町を差別化する象徴として機能していたのである。そうした意味を持つ呼称が地域に定着することとは、同時に、地域社会のなかに公儀が浸透していくことをも示しているのではなからうか。水利組合の地域秩序のなかに宿駅―助郷の「地域」編成が入り込んでいくからである。その中核はいうまでもなく在方町であった。^(注81)しかし、在方町内部においては「地域」の中核としての機能を希求する階層と、地域との共同を志向する階層との間の矛盾も存在したのであった。

「町」呼称を持つことのなかった大多数の在方町についても、地域社会との関係では同様の事態が展開したと考えられる。呼称に注目することによって在方町と地域との関係が明瞭に浮かび上がってきたわけである。

しかし、この時期に地域秩序が一変してしまうわけではもちろんない。交通の局面以外では、自律的な地域の秩序は一方で厳然として存在した。それは在方町自身が「地域」のなかで他村とは区別される特別な中核であると同時に、地域の他村と対等な一員でもあったためである。対象としている地域では、史料1でみたように一七二三（享保八）年八月の米直段の低下による百姓の困窮に対する救済願いが、摂津東成郡榎並庄廿五カ村、茨田郡八ヶ庄拾九カ村・

五ヶ庄拾六カ村・門真之庄五カ村・大庭大久保庄拾六カ村・九ヶ庄拾一カ村の計九二カ村から提出されている。このような広域訴願はあくまでもそれまでの水利組織を基軸とした地域結合に基づいて行なわれていたのである。

ところで、在方町の「町」呼称の持つ意味については、本稿で取り上げた事例では、問題の一半しか明らかにしていない。「町」呼称のもう一つの意味は、市や流通の問題にかかわる。^(注32) 本稿は在方町と地域の問題の入り口に立ったにすぎないのである。

〔注〕

- (1) 拙稿A「在方町の都市構造を探る」青木美智男・保坂智編『新視点日本の歴史』五、新人物往来社、一九九三年
- (2) 拙稿B「在方町の町・宿呼称の変化について」『史料館研究紀要』二四、一九九三年
- (3) 地方史研究協議会『日本の町―その歴史的構造』雄山閣、一九五八年
- (4) 中島義一「明治前期の町―その呼称―」『大正大学研究紀要』五七輯、一九七二年、「近世後期の町―相模の場合―」『新地理』一七巻二号、一九六九年ほか。
- (5) 丸山雅成『近世宿駅の基礎的研究』第一、吉川弘文館、一九七四年、三二―三七頁、「日本近世交通史の研究」吉川弘文館、一九八八年、二二六―二四一頁
- (6) 土田良一「近世宿駅の呼称と宿高」『鹿児島短期大学研究紀要』四九、一九九二年
- (7) 吉田伸之「日本近世の交通支配と身分」『中世史講座』三、学生社、一九八二年
- (8) 深井甚三「近世前期における加賀藩の町・町役・町人」『富山大学教育学部紀要A』三三、一九八四年
- (9) 近世における地域社会の研究史と課題については、渡邊尚志「日本近世における地域」(『歴史科学と教育』一〇、一九九一年)を参照。但し、その後の重要な成果でかつ本文で関説していないものとして、水本邦彦「近世の鄉村自治と行政」(東京大学出版会、一九九三年)を挙げることができる。水本氏の近著の特に三章・四章においては、用水・営場という生産条件や神社祭祀といった結合契機をもつ村落結合の構造と、その構造の中世からの継承と再編、及び近世中期以降の新たな村連合との連鎖・重層関係が明らかにされ、近世の地域社会が総合的に捉えられており、

近世地域社会研究の大きな段階を画したといつてよい。

- (10) 石原佳子「近世水利組織と村落」淀川右岸中流域三ヶ牧組四ヶ村を中心に「ビストリア」一〇一、一九八三年
- (11) 村田路人「近世前半期の地域と役」治水・水利普請の検討を通じて「日本史研究」三三〇、一九八九年
- (12) 大塚英二「村田報告によせて」『日本史研究』三二一、一九八九年、および「(村田報告) 討論と反省」『日本史研究』三二〇
- (13) 注9 渡邊論文
- (14) 貝塚和実「近世地域社会の構造と変容」『歴史学研究』六二六、一九九一年
- (15) 近世史部会討論要旨「歴史学研究」六二六
- (16) 矢田俊文「本願寺教団の裏書からみた16・17世紀における地域認識」『環日本海地域比較史研究』一、一九九二年
- (17) 拙稿B
- (18) 菊田太郎「東海道守口宿・守口駅」柳原書店、一九五九年
- (19) 一七四三年は延享元年「河州茨田郡守口町明細記」(守口文庫蔵)、一七五七年は宝暦七年「(守口町用水及び樋絵図)」(守口市教育委員会「守口市文化財調査報告書」四、古文書助郷編、一九八六年(以下「文化財」と略記)口絵写真)
- (20) 天保一三年「宿高井家数人別書上帳」(守口文庫蔵)
- (21) 菊田前掲書
- (22) 守口市史編集委員会「守口市史」史料編、一九六二年(以下「市史」と略記)二四・三二頁
- (23) 奥田尚編集代表「門真市史」一、一九八八年、一七・一三六頁。
- (24) 小出博「淀川と利根川」中公新書、一九七五年
- (25) 例えば、守口町と土居村(中世の守口庄)は土居村にある「氏神牛頭天皇社」を両村の「立会」の神社としていた(「市史」二九頁)。また、北寺方・南寺方・焼野(中世の寺方庄、近世の寺方組)の三カ村も北寺方村にある「氏神天満宮」が「立会」の神社であった(「市史」四二頁)。
- (26) 大阪府史編集専門委員会「大阪府史」五、近世編一、一九八五年。
- (27) 福山昭「近世農村金融の構造」雄山閣、一九七五年、七頁。
- (28) ちなみに差出しのなかの「五ヶ庄」が守口の属する「五ヶ所」組合村である。
- (29) 「門真市史」一、「大阪府史」五。
- (30) 守口文庫蔵。
- (31) 「宿方御証文亨」(守口文庫蔵)
- (32) 吉田家文書。
- (33) 同前。
- (34) 「市史」四一六頁。

- (35) 『文化財』四一・四二頁。
- (36) 注31に同じ。
- (37) 『文化財』四二・四三頁。
- (38) 吉田家文書。
- (39) 『市史』四九七頁。
- (40) 『文化財』四六頁。
- (41) 『市史』四九九頁。
- (42) 『文化財』四七頁。
- (43) 『市史』。
- (44) 渡邊尚志『陸奥国白河郡踏瀬村箭内家文書目録』一・二、国立史料館、一九九一・九二年。
- (45) 吉田家文書。
- (46) 堤奉行については村田路人「近世摂河における河川支配の実態と性格―堤奉行と川奉行を通じて―」『ヒストリア』八五、一九七九年。
- (47) 〃(49) 吉田家文書。但し史料4の差出しの村名は原本では一列である。紙幅の都合上四段に記した。
- (50) 態と切とは、洪水によって淀川上流の左岸堤防が決壊しこの地域が浸水した場合に下流の野田村の堤防を故意に切って浸水を淀川に排水することという(村田前掲注11論文)。
- (51) 〃(56) 吉田家文書。
- (57) 村田前掲注11論文
- (58) 『市史』三六頁。
- (59) 〃(64) 吉田家文書。
- (65) 菊田前掲書。
- (66) 『文化財』六六頁。
- (67) 延宝二・三・四年の年貢割付状(守口文庫蔵)では村高五〇二石余のうち四二五石余から四六七石余が「当水損捨」として引かれている。
- (68) 吉田家文書。
- (69) 『文化財』四一頁。なおこの時助郷に指定された村々に史料16中の難生村は含まれていない。
- (70) 児玉幸多編『日本交通史』吉川弘文館(一九九二年)、渡辺信夫「近世の交通体系」(『岩波講座日本通史』一一〇、近世1〃一九九三年)
- (71) 『文化財』四三・四四頁。
- (72) 同前四五・四六頁。ところで、この一七〇三・四年という時期は、宿駅としての名称は少なくとも幕府・代官の間では「守口町」であつた時期である。しかし、一七〇四年の願書引用中にもあるように、助郷に指定された村から出された三つの願書において「守口宿」と記されている。このことは、先に分析した水利争論において守口の負担回避の特権を認めず、地域のなかの村の一つとして水利普請の負担をさせようとする水利組合の論理の表現として「守口町」といわず「守口村」ということとその論理は通底する。すなわち、水利負担をめぐる組合村の論理からすれば、

助郷割替え願いにおいても「守口町」と表現することはできなかつたのではあるまいか。しかし、かといつて願書の内容が守口の宿駅の機能にかかわる問題であつたために「守口村」という呼称もありえず、一六九四年まで使用されてゐた「守口宿」という呼称が選ばれたものと憶測される。

(73) 『市史』三三二—三三四頁。史料19・20も同じ。

(74) 児玉幸多編『日本交通史』吉川弘文館、一九九二年

(75) 水本邦彦『近世の村社会と国家』東京大学出版会、一九八七年。

(76) 菊田前掲書、二四頁。

(77) この解釈は菊田前掲書による。

(78) 『市史』四五六頁。

(79) 水本前掲書。

(80) 村田前掲論文。

(81) 本稿では水利の地域と助郷の「地域」という二項対立的叙述を行なつたために、あたかも水利の地域が自律的地域という読まれ方をされるおそれがあるが、筆者の意図はそうではない。すでに「はじめに」でとりあげた先行研究が

明らかにしているように、水利組織自体自律的な共同組織の側面と権力による編成の側面の双方を持つてゐる。ただし、水利と助郷を比較した場合、相対的には前者の方がより自律的な側面を持つてゐるということは言えるであらう。また、助郷組織自体は当然権力による編成組織ではあるがその具体的な運営の側面での自律性は一定程度存在するであらうことも指摘しておきたい。

(82) 拙稿B参照。

『追記』史料閲覧に際し快くご協力いただきました、吉田義昭氏、直原正知氏（守口市史編纂室）、及び財団法人守口文庫の皆様がこの場を借りて深く感謝致します。なお、本稿は、拙稿「在方町」（『岩波講座日本通史』一二八近世2ⅴ、一九九四年三月）のもとになる論文である。岩波講座の拙稿では史料を引用する紙幅が全くなかつたため、関連する先行研究への言及、及び史料引用とそれに伴う細かな説明を大幅に補つてゐる。また、岩波講座の二章は本稿の三章にあたるが、この部分は史料引用の都合上大きく構成を変えている。